

川面を漂う犬の死骸

チャート・コープチツティ
訳 宇戸清治

1

あなたは身体ごと石壁か、なにかそんな硬い物に衝突したのを感じる。身体中を衝撃が突き抜ける。その刹那、あなたの耳にドーンという轟音が響く。衝突音と身体への衝撃が一つに混ざり合って、あなたの感覚器官の中で反響し、ねぐらで驚いて起きたばかりの動物のように迅速に知覚神経の末端まで行き渡る。喩えれば、身体がめっちゃめちゃに壊れ、先っぽだけがピクピクと細かく震えている感覚である。

あなたは痛みはなにも感じない。分かるのは身体のあらゆる部位がブルブルと震えていることだけで、まるで夢の中で交通事故に遭遇したのと変わりはない。突然その夢から覚めてホッとしたあなたは目を開いて外の光景を見る。ヘッドライトの強烈な光が目に入ってくる。その光を見た

のとほぼ同時に、あなたは恐怖で目を閉じる。いま垣間見た光景が事実だとは信じたくなって、ハアハアと喘ぎながらこう自分に語りかける。

「これは夢だ」

「ただの夢なんだ」

恐怖で一杯の心がそう言い張り、いま起きている一切の出来事はただの悪夢なんだと懸命に認識したがる。ただ不運なのは、身体の感覚器官が、これまでと変わらず真面目に本来の役目を遂行し続けていることだ。それは、あらゆるやり方でこれはただの夢だと思っていたがっているあなたの考えに逆らっている。その認識が、直面している事実を直視させようとなかば強引にあなたの臉をこじ開ける。眼球がポトンと落下した音が聞こえた気がする。その刹那、あなたの耳に駆けつけた人物が発した言葉が届く。

「死んでるのか？」

「いや、まだ生きていますよ。」

あなたの耳に周囲に群がった野次馬たちの声が届く。タイヤの音、クラクションのかん高い音が聞こえる。状況を訊いている野次馬たちの発する大声が耳に届く。

「ドアをこじ開けた方がいい」

「早く助けよう」

「おい、そつちを掴んでくれ」

「1、2、3、それ！」

あなたの身体は運転席から引き摺り出される。靴が脱げて車内の床に落ちる。あなたはまだ真実を目にするのが怖くて目を開けられない。しかし、少なくとも三人以上の善良な市民があなたを車から外に出してくれたことは分かる。

あなたの背中は硬いコンクリートの地面に接している。彼らがあなたをゆっくりと地面に横たえからだ。地面の温もりがとたんにあなたの肉体に届く。あなたはその姿勢でずっと横たわったまままでいたいと思う。まだ目を開けて状況を確かめる心の余裕はない。ずっと頭にあるのは、これは夢を見ているんだという考えだ。その考えは、周囲

の状況の一切があなたの願望する世界とは矛盾しているにも関わらず、これらの出来事はすべてが夢なんだと主張し続けている。

「生まれ、来るな」

「誰か嗅ぎ薬を持っている人いないか？」

嗅ぎ薬の匂いが鼻孔に侵入する、あなたは自分自身がこの匂いを望んでいるのか知りもしないし、それになぜ嗅がなくてはならないのかという問いに答えられないままに、強引に侵入してきた「匂い」を嗅ぐ。

「もしもし、大丈夫？」

あなたは左腕を揺すりながら自分を呼ぶ声を聞く。その声はあなたを眠りから起こそうとしているかのようだ。だがあなたはまだ目覚めたくないし、まだこの寝床にダランと脱力状態で寝続けていたいと思う。あなたはまだ気を失っている「ふり」を続け、他人がこの人は本当に気を失っていると思わせたい。いまはまだ事実に対する責任を引き受ける勇氣はない。いまのあなたはそれを拒んでいる。少なくともこんな風に「気を失っている」間だけは、実人生からしばらくドロップアウトすると変わりはない。そんなあなたは、もう一度嗅ぎ薬の匂いがかがされたその

瞬間に「息を吹き返す」準備が整っていない。

「血が止まらないみたい」と女性の震え声がする。

「血」という言葉を聞いたとたん、あなたは突然、頭部に鋭い痛みを感じる。それとほぼ同時にあなたは「病院」に考えを巡らす。この言葉は一卵性双生児と同じで、一人が「血」という言葉を発すれば、他方はすぐに「病院」という言葉を思いつく。あなたはこの対になった言葉がいつから脳裏に刻まれたのかを知らない。頭部の痛みはますます強まり、傷口から流れているであろう血の経路を想像する。嗅ぎ葉の匂いに混じった血の臭いを鼻孔が感知します。血の臭いは強烈で、あなたの心を恐怖で満たす。

「あつちの車の人は無事か？」

「車はべちゃんこだけど、全員、這い出たわ。この人はどうなの？ 失神してるの？ 病院に運んだ方が良さそうね」

あなたははいよいよ目を開けて事実を受け入れるべき時が来たことを悟る。事実なんていつだって後からついてくるものだ。どの方向に逃げようが、そいつはびたりと後を追っかけてきて消えることはない。そして最後にそいつがあなたを角に追い詰めたとき、逃げ道はもう塞がられてい

る。残された道はただ一つ、振り返ってそいつと対決することだ。そいつと闘う。あなたは気力を振り絞り、その時点で残っている一切の勇気をかき集めて。目を開けるとすぐに周囲に群がって自分を見下ろしている野次馬の顔が目に入る。

「息を吹き返した」

「気がついたぞ」

時間は真夜中のはずなのに、道路脇にまで長く延びた車のヘッドライトの光のせいで、付近はまるでパーティー会場のように明るい。道路上に停まった車を取り囲んでいる人々もあなたの周囲の人々も、本当にパーティーに参加しているかのようにぎっしりだ。

あなたはゆっくりと身体を起こして地面にあぐらをかいた姿勢になる。若い男がやってきてあなたの身体を支える。軍服のような服を着ている。上がカーキ色の丸襟服で、下は同じ色の短パンだ。あなたは起き上がろうとするが、頭がぼうつとして自分がどこにいるのか、どの道路なのか判別できない。場所や道路の名前が頭の中に張りついたまま出てこないのだ。思いつくただ一つのこととは、車で急いで病院に行かなくてはならないことだ。そこであなたは道路に

停まっている複数の車の方にヨロヨロと歩いて行く。

「急いで病院に行ったほうがいい。車のことは心配いりませんよ。ぼくが見ていてあげます」。身体を支えてくれている若い男があなたにそう語りかける。

「車の中の貴重品をみんな取り出せ」と中年男性がクラクションの音に負けない大声で言う。あなたの車は道路上に静かに停まったままだ。車体の前部は半分ほどが反対車線に突っ込んでいいる。あなたの車の前でタクシーがべちゃんこ状態で停止している。とくに前部は恐ろしいほどに大破している。振り返って自分の車を見ると、それもタクシーの状態とたいして変わらない。バンパーの右が湾曲してタイヤに突き刺さり、ボンネットはひしゃげている。右のヘッドランプは衝突の衝撃でグチャグチャに潰れてボディにめりこみ、車体のフロントは見る影もなくなっている。細かく砕けたフロントガラスが道路上に散乱している。

あなたは一瞬だけ痛みを忘れる。何もうまくやれず、目前の惨状が信じられない。まるで夢と現実の二つの世界の間を漂っているようで、自分の見ている現実が信じられない。

「車の中の貴重品をチェックした方がいい」、中年男性が

そう忠告する。その声があなたを現実の世界に引き戻す。あなたは振り向いてその男性にお礼を述べ、車のドアに向かつて歩き出す。

車の中に頭を突き入れ、愛用のショルダーバッグを取り出す。それから頭を引つ込め、窓越しに後部座席を見る。後方の車のヘッドライトがあなたの顔の真つ赤な血を浮かび上がらせる。顔中からポトポトと垂れている。ゾクツとしてヨロヨロと車を離れる。

——急いで病院に行かなくては、とあなたは自分に告げる。

「車は心配ありませんよ、おいらが見ていてあげます。どうぞ行ってください」。若者が車を離れるあなたの身体を支える。

「怪我人はこっちへ運んで」もう一人の軍服のようなものを着た男が道路脇から大声をかける。その方向には車が二台停まっている。一台はタクシーで、もう一台は黒いフィルムを窓に貼ったシルバーのセダンだ。

あなたはタクシーに乗り込む。タクシーはかなり大急ぎで動き出す。振り返ってもう一度あなたの事故車を見る。それはいまだに沈黙を守ったまま車道を遮るように停まっ

ている。その後方には何十台もの車がヘッドライトを灯けたまま押し合いへし合いぎゅうぎゅう詰めで長い列をつつている。

「どんな運転をしていたんです？」質問の声にはやや生硬な響きがある。あなたは後ろを振り返ってその声の主を確かめる。彼は片方の目だけであなたを見つめていて、左目は手に握ったタオルの目だけであなたを見つめていて、右目に友好的とは言えないその眼差しは鋭い光を放っている。

「居眠りしたようなんです」とあなたは落ち着いた声で答える。それ以上何か付け足そうとは思わない。

「あなたの身体が引きずり出されたとき、この人はもう駄目だと思いましたよ」と隣に座っている男が口を挟む。手には頭に当てるタオルを握っている。

あなたは皮肉っぽく微笑み、背もたれに身体を預ける。そこでタオルを掴んで傷口に当て目をつむる。後部座席の別の男が口を開く。

「ぼくは安全運転で良かった」

「もう一台の方も速度オーバーだろう。だからあそこまで壊れたんだ。どんな感じでぶつかったの？」

「前のについて走ってたら、突然ハンドルを切った。向こうが追突を避けようとしたところへこっちがぶつかったってわけさ」

「衝突したのは何台？」

「三台。先頭を走っていた車もぶつけられた」

「乗員は全員負傷か？」

「知らないけど、こっちは全員負傷だ。俺たちはまだましだ。事故るのが見えたから、なんとか大怪我を免れ、頭だけは守れたから。それでも畜生つてことに変わりはないけど」

「残念だったな。今夜は人出が多い。もつと何度も巻き込まれていたかも」

「そうなんだ」

「運が悪かったのよ。大した怪我じゃなくてよかったよ」

「親父さんはもう知ってるかな？」

「あれは俺の車だから。それでもふざけんなだけだ」

「車の見張りは誰が？」

「この辺の兵舎の兵隊かな」

「見張ってくれる人がいて良かったね。でなきや、警官が来るまでに備品があつという間に盗られてしまう」

「いや。中にはもうほとんど何も残っていない」

「おたく、あんまり驚いた様子じゃないね」とここであなたの隣の男が話に加わる。

「そうでもないよ。あの時、俺たち、落ち着けて言われたからさ」

「何をしに行くところだったですか？」と運転手が尋ねる。

「パーティーに行くところだった」。答えたのはあなたの隣に座っている男である。

「あの年配男性の話では姪っ子の卒業祝いに行くところだったみたいだ」と前の座席の男が答える。

「こんなになつた以上は、とりあえず先に病院に行つてそこで祝うしかないね」と運転手が冗談っぽく言う。

…タクシーはスピードを落とす。左折ウィンカーがティックテック、ティックテックと音を出す。あなたは目を開けて窓外を見る。その瞬間、タクシーはカーブを回つて病院に入つていく。それからゆつくりと救急センターの病棟前の車寄せに向かう。完全に停まると、移動式ベッドがぴたつと車の脇につけられる。乗客全員がタクシーから降りる。

「もしもし料金を」と運転手が声をかける。三人が一斉におたくの責任だという顔であなたの方を見る。

「いくら？」あなたは顔を上げて訊く。

「五〇バーツになります」

あなたはお金を掴んで渡す。タクシーは病棟の前をバックして去つて行く。

「この上に横になつてください」と病院のスタッフがあなたに告げる。

それ以上は歩く気力がなくなったあなたはそのストレッチャーに横たわり、運ばれていくのに任せる。仰向けのまま、一個また一個と視界を過ぎていく天井の蛍光灯を見つめる。慌ただしい声をあげている人々の側を過ぎる。酔つ払いが大声でやり返してやると叫んでいる。子供がギャンギャン泣き、どこかのおかみさんが大声で亭主を呼んでいる。夜中に怪我をした者がそれぞれここに集つて夜を過ごしているのだ。あなたは横になつてそれらの人々を眺める。視線を移すと、全身を絆創膏でぐるぐるに巻かれ、服が血で真っ赤の男性の姿が見える。彼はぼんやりとした様子でストレッチャーの通過地点に座り込んでいる。あなたは、自分はまだあの人より軽傷で済んでラッキーだったと心中で思う。

ストレッチャーは左へ曲がつてある部屋に入っていく。仕

事が終わると、ストレッチャーを押していたスタッフはあなたを一人だけベッドに残して、空になったストレッチャーを押して部屋から出て行く。病室はカーテンで二つに仕切られている。壁にはどの側にも医療機器が収まったロッカーがある。消毒液の強い臭いが部屋中に満ちている。受け皿にポトポトンという音をたてている機械が向かい側の病室にあるのが推測できる。

一人だけにされると、物に衝突し、車体がべちゃんこにひしゃげるときの音がまた突然蘇って意識を攪乱し、深いところに潜んでいた野性を目覚めさせる。そいつは狼狽して、隠れる場所を探す。静かに落ち着ける場所を探し回るのが、それは見つからない。そこで終わりのない混乱がやって来る。

——何てことだ。まったく。こんなことって。

——落ち着け。命が助かったただけじゃないか、とあなたは自分を慰める。

——医者はどうしてまだ来ない。

たぶん、傷が軽いんだろう。もし重傷だったら、急いで駆けつけてくるはずだ。

自分に都合良く考えたあなたは、それでやっと少し安

堵する。しよつちゅうというわけではないが、病院に行ったときのことを考えてみる。家にいるときはいつも痛みが酷くなる一方なのとは違って、医者のお側にいるといつも痛みは治まった。以前腰が痛くて歩けなかった時、病院へ行って診察券を待っている間、まだ医者の診察を受けていないのに、腰痛が改善するのを感じたものだ。

いまもそれと似ている。身体の負傷に大して不安を感じない。向かいの病室から聞こえる液体の落下音はまだ途切れることなく続いている。すぐに通路に面したドアに向かって歩いてくる人物の足音が聞こえる。それは次第に近づき、ベッドの脇で止まる。

「まったく今夜は多いわね」。女性の声だ。

「本当にうんざり。負傷者ばかりで頭がくらくらする」。

これはもう一人の女性の愚痴だ。

あなたは目を開けて声の主を見つめる。白衣を身につけた若い二人の看護師が見える。あなたは微笑む。

「何にぶつかったんですか?」。大きな懐中電灯であなたの頭部を照らしながら最初の女が尋ねる。

「車をぶつけたんです」。あなたはそれ以上のことは喋りたくない。

ラッキーなことに二人の女性はそれ以上の質問はしない。彼女たちにはこの手の事故の負傷者を手当てした経験があり、目新しいことでも何でもないからかもしれない。あなたには二人が医療器具を準備している音だけが聞こえる。そのうちにあなたの額の傷がきれいに洗浄される。優しい指使いで、ヒリヒリ痛むことはない。

——麻酔薬か何かを使っているのかな、とあなたは自分に問いかける。

「縫うの？ だったら先に麻酔薬は？」、と訊く女性の声がある。

「大丈夫。打ったら顔が腫れるもの」

——麻酔なしじゃ痛いよ、とあなた自身は心配になる。

「先に麻酔を注射しないんですか？」、とあなたは目をつむったままなにげに尋ねる。

「しません。普通は顔の近くに注射すると、顔が腫れてくるんです。ちょっとだけ我慢してください。痛くはありませんから」、彼女の返事は実直そのもので、信頼に足る。

それでもあなたは恐怖で怯える。この時点ではあなたは車の損害についての心配は完全に念頭から消えている。

額への指の接触が、看護師二人が処置を始めたことを告

げる。ずっとチクチクした痛みがあり、時には歯を噛みしめて耐えなくてはならない。

「顎もね。ここよ、ここ」

二人は助け合って傷の処置を終える。看護師が首筋と胸部にこびりついて固まった血をきれいに拭いさつている間、終わるまでがまるで一年ほどの長さにも感じられる。

「まだほかに痛い箇所がありますか？ 縫っていないところで」

「いいえ」

「痛いところがあつたら言ってくださいね」ともう一人が声をかける。

「オーケー、終わりました。傷口を毎日洗浄消毒するのを忘れないでくださいね」。それからあつという間に消灯される。

あなたは目を開けて二人を見る。だがあなたの目はまだ霞がかかったようで、顔の形がぼんやり見えるだけである。

「どうも」あなたはお礼を述べて、ゆっくりと体を起こし、ベッドから降りようとする。足が床に触れた途端、いつもとは違う感覚が何かを訴えるのを感じる。あなたは車に

残してきた脱げた靴のことを思い出し、生活に欠かせない
あるものを失った人間として素足で床に立たねばならない
ことに違和感を覚える。だが、いまのあなたはこの病室
を出なくてはならない。あなたは靴のことは後回しにする
ことに決める。全体重をベッドから離れたとき、両方の膝
が鋭い痛みを訴える。一步を踏み出すことができず、ベッ
ドの縁をしっかりと掴んで、筋違いが元に戻るのを待つ。そ
れから足が冷たい床にまだ慣れていないのに膝を曲げ、ゆっ
くり歩いて部屋から出る。

「外で診察券をお作りしていますからね」と看護師が器
具を片付けながらあなたの背中から出る。視線を巡らし

あなたにはリュックを持って部屋から出る。視線を巡らし
て診察券の発行所を探す。人々はいまも休むことなく慌
ただしく動き回っている。一台の搬送ストレッチャーがあな
たの目の前を通り過ぎる。運ばれている人物は顔色が失
せ、腹部の辺りに血が滴っている。ストレッチャーの後を二、
三人が固まって早足で追いかけている。あなたは立ち止まっ
てしばらくその光景に目をやる。目眩がして、どこかで休
みたいのを感じる。

「ほら見て。やっぱりここにいた」。若い男が同行してきた

一人の警官に告げる。

「ちよつと署へご同行お願いできますか?」。その警官があ
なたに丁寧な言葉で告げる。

あなたは、その前にちよつと休ませてくださいと頼みた
いのだが、二人の焦った様子を見ると、気持ちを変えて
相手に従うことにする。若い男はあなたの歩き方を見て、
あなたの身体を支える。見かけからその人物の年齢は自
分とほぼ同じだろうとあなたは見当をつける。警官は肩
章を付けた長袖のスーツを身につけ、ネクタイを絞めてい
る。年齢はあなたより若いようだが、その所作で高い地
位にあることを匂わせている。恐らく警部あたりだろう。

歩いている間にも、多くの人の視線があなたに向けられ
る。いま自分が置かれている状況に慣れはじめたとはいえ、
自分が法を犯した惨めな人間の気分になる。交通事故を
起こして、他人に迷惑をかけた犯罪者。今後直面しなく
てはならないのは、法律の問題であり、ルールの問題である。
自分たちが決めておいた法とルールの元に置かれることに
なるのだ……。

若い男はキーを回してドアを開け、車に乗り込む。そ
して中からドアロックを外し、警部とあなたを中に招く。

あなたは先に後部座席に乗り込んで座る。警部はあなたの隣に座る。

「どうです。痛みますか?」、と若い男は車のバックを誘導するため後方を見ながら訊く。

「ま、我慢できます」

「膝を曲げるときに痛むんですよね」運転手は車がちゃんとバックできたのを確かめてからそう告げる。

「一体なぜぶつかったんです?」。若い警部が視線を前に戻して訊く。

「うっかり居眠りしてしまつて」。あなたは相手の目を見て答える。若い警部の顔がおぼろげな光の中で少し微笑んでいる。あなたはこの人物にそれ以上尋問してほしくなくて、顔を外に向ける。

病院を出た車は左折して幹線道路に入る。あなたは崩れた体勢を直すように身体を警部側に戻そうとする。ビクつくなど自分に言い聞かせる。しかし、運転手がブレーキを踏む度に、その思いは簡単には消えず、気分を落ち着かせようと頑張る。視界を横切っていく移動物体を漠然と見つめる。きつと誰も重傷にはなっていないだろう、という自分に都合の良い考えが起きる。しかしそれも無

駄で、心の中では、お前は自己暗示をかけている、自分を騙している、という声がある。そこで翻つて、二人の会話に神経をとがらす。いま自分が考えていることを忘れるために。

「……大勢出かけてるなあ」

「勤め人だったら、明日はみんな欠勤だな」

「みんな文句言つてますよね、景気が悪いって。それでもたくさん人間がああやって遊びに出かけているわけで」。運転手が視線を道路に向けたまま私見を述べる。

「おたく、ご職業は何を?」若い警部があなたに聞き直つて話かける。

「広告代理店勤務です」

「明日は休みですか?」

「三連休です。再開は月曜日」

「ほお、広告業界はいいですね。クリスマスイブのほかに土曜も日曜も休みだなんて」。運転手が会話に割り込む。自分の仕事に不平を鳴らすような声の調子である。

「で、運転手さんは?何のお仕事です?」。あなたはお喋りを続けたい。事故の話でなければ何でも良い。

「医者です。さっきあなたが治療を受けた病院勤務です

よ」

「ほお」警部が驚いた声を挙げ、それから笑いが続く。「で、先生はなんでまたこの人と関係あるんですか？」とニコニコしながら尋ねる。

警部が、あなたが触れられたくない話題に話を持っていったことにあなたの心はざわつき始める。

「友達の結婚式に行ってきたんです。その帰りに友達を送って来たというわけです。いつもはあの道を通ることはありません。あなたの車が突進してくるのが見えました。私の方は避けましたが、避けきれず、後部にちよつとぶつけられました。僕の車は前も後ろも壊れてしまいました。おたくはまだ幸運ですよ。私がぶつかりそうになった車なんて、その運転手は気にも留めないで。その辺りに止めて見物していたなあ。たぶんおたくの怪我の方が重いと考えて、先に病院に行つたんでしょう。時間を無駄にしたくなかつたのかも……」と医師は話す。そのお陰であなたは事故の顛末をつなぎ合わせて考えることができるようになる。「いつもはあの道を通つて帰ることはないんですが……」。自分に腹を立てているかのように語尾を延ばした独り言だが、あなたにはそれでも聞こえる。

この医師に言つてやりたいのは、その友人はおまえさんに泊まらせるべきだった。なんとしてでも泊まるように誘うべきだった、もしおまえさんが、送つてくれと頼む友人の言葉に従わなければ事故に巻き込まれることはなかつたかもしれない、ということだ。だがすぐに別の考えがわいてくる。どうであれ、あの事故は起るべくして起きたのであつて、自分の責任を覆す理由にはならない、と。そこで、あなたは口を閉ざす。何も言いたくない。

「今夜は事故が多い。ぼくはもう三度も医局のシフトに入ったけど、もう一回あるかもしれない。あれほどの多重事故で重傷者が出なくて、すこし重い怪我だけで済んだのはおたくのケースくらいかも。でも死人がいけないのは不幸中の幸いでしたね」。男は振り返つてあなたを慰めるように言う。この状況ではあなたはただ笑みを返すだけだ。

その後は話が途絶える。この話題を巡る話はあなたには楽しくも何もないからである。あなたはまた反対側の車窓を見る。

「この先の路地を左折して。そう、あそこだ」と警部が指さしながら運転手である医師に告げる。

路地をしばらく走り、大通りへ抜けて左折し警察署の

敷地に入るまでは隣の警部がずっとナビゲーターを務める。医師は車を車寄せのある建物の上り階段に接した場所に止める。あなたは背中にもリュックを背負って車から一歩を踏み出す。またもや両膝に違和感を感じる。骨にひびが入っているような鋭い痛みである。手はしっかりと車の屋根を掴んでいる。だが、車が少し移動したので、あなたは手を離さざるを得なくなる。

「被害者が到着するのを待って、それから話し合いますよ。警部はあなたにそう告げて署の階段を上る。それから何を思ったか、下を振り向く。

「先にあなたの事故車を見に行っても構いませんよ。私物は全部出して置いて下さい」。そう告げると、また階段を上って消える。あなたは翻ってゆっくりと階段を降りる。頑張つて膝をかばうようにゆっくりと。それでもなおも靴を履いていない足は砂利の鋭い角にさらされる。事故車が置いてある駐車場の敷地に向かって歩いていると、駐車場に車を止めた医師がちょうどあなたを追いつき、肩に手を貸す。

「明日、膝のレントゲンを撮ってみましょう」と医師は歩きながらあなたに言う。「ま、大したことはないと思いま

すけどね。だってあなたはこれだけ歩いていきますから。単にひねっただけの筋違いでしょう」。あなたは気持ちが悪くなる。「たぶん衝突の際に胸にぶつけたのかも」とあなたは想像を働かせて言う。医師もあなたの推測に納得して頷く。

駐車場一帯は国旗掲揚柱の上から差し込む月の光で明るく照らされている。事故車が五、六台並んでいる。どれもつぶれてぐしゃぐしゃだ。その様子はまるでこれから墓場へ運ばれるのを待っている遺体と変わりはない。あなたの車もその集団の中にある。様子が違っていているのはあなたの事故車を取り囲んで見ている人間が何人もいることだ。まるでたつたいま亡くなったばかりの遺体でも覗き込んでいるかのような様子で。

あなたは人垣の間をぬって少しずつ前が出る。人々はそんなあなたに関心を持ち始める。たぶんガーゼをしているのと、健常者とは違う歩き方のせいだろう。

「おたくがこの車の運転手さん？」中の一人があなたに問いかける。あなたは頷いて笑顔返す。その時の自分の作り笑顔は見えなくても、それが醒めた笑いであることはわかる。悲しみから出た笑みである以上はそうだろう。

「信じがたいな。車がべちゃんこなのに、本人はまだ歩けるなんて。奇跡だよ」別の人物がその意見に賛同する。「ハンドルは折れてるし、誰だつて胸の方もきつとぐちゃぐちゃだと思うよ」

「おたく、どんな万能護符を身につけてるの？ちよつと見せてもらえないかな？」

「何もつけてませんよ」とあなたは正直に答える。

「極上の御守りを持っている人には、見せてもらいたいものですよね」と別の人物が見せてほしいと言った人物に歩調を合わせる。

「タクシーの運転手はどうなっちゃったの？」

「わかりません」あなたは言葉を取られないように答える。

「たぶん大したことないさ。タクシーはここまでメチャメチャに潰れていないから」

「ぶつかったのはどこだろう？」

あなたはそれらの問いに答えるのに億劫さを感じる。この連中はみなまるで芸能レポーターでもあるかのように根掘り葉掘り知りたがる。あなたは車に身を乗り出す。今最初にやりたいのは脱げた靴を探し出すことだ。目を凝らして隅々まで視線をめぐらすが、それでも見つからない。

い。ぐつたりしたあなたの身体が車から引きずり出される前までは、足から脱げて車内にあったのをたしかに覚えているのに、だ。突然、社内に残したままの別の品物を思いつく。父親にあげようと買った礼装シャツ、母親へのプレゼントの絹布地、妹から購入を頼まれていた英語学習のカセットテープ。それらの品物をあなたは後部座席に置いていた。しかし、いまではそれらは跡形もなく、服を入れていた紙袋さえも見当たらない。それどころか、グローブボックスの蓋も空いたままで、紙くずが乱雑に散らばっている。どうやら誰かが大急ぎで荒らしたようだ。

あなたは物がなくなったことを惜しみ、それは次第に怒りに変わる。あなたの物を奪った人間は、一体どんな気持ちで盗つていったのか。

あなたは車から降りる。このとんでもない話を医師に訴えたいと思う。しかし医師の姿は見えない。どこへ行つたのか分からず、人々の視線に囲まれた中でひたすら怒りを募らせる。いったい誰が車の中にあつた私物を持ち去つたのかと周囲に問い質したくなる。この件を覚えておくためにもここで人々に話して聞かせておきたいと思う。しかし、語るには遅すぎ、搜索するにもはや遅すぎる。

——車を見ていてやるといったあの兵隊か？

——事故車を警察署の駐車場まで牽引した人物か？

——ここで事故車を遠巻きにしている近所の野次馬か？

誰が物を盗んだのか考えつかない。自分の目で確かめていない以上、そのうちの誰をも非難したくはない。まだ残っているものを掻き集めた方がましだ。無くなったものは放っておくしかない。あなたはあきらめきれないにもかかわらず、あきらめるように自分を促す。車に残されたものを一か所に集める方法を考える。トランクルームにはまだスペアタイヤとジャッキがあるはずだ。無くなっているかと思ったら事故車を見張つていたら人をまた探さなくては。だがいったい誰がそんな役目を引き受けてくれるだろう。策が尽きたところで、あなたは通りがかりのタクシー運転手に事故車の見張り役を頼むリスクを犯すことを決断する。あなたは野次馬を押し分けて歩く。支えてくれる人がいない状態では、あなたの歩き方は膝に関節炎を患っている老人のそれといくらも変わらない。悲惨な状況ながら、それでもあなたは足を引きずるように進み、どうにか大通りまで達する。そこで通りかかったタクシーを呼び寄せ、ことのあらましを話して聞かせる。事故車を

見張っている間の時間分の手当を払うという条件を持ち出して。タクシー運転手はあなたの話を同情した表情で聞き、まだ値段で折り合っていないのに頭を縦に振って同意する。

車内に残した物の片づけが終わると、あなたはよろめきながら階段を上がって休もうと警察署の建物を目指す。医師が自分の車がこすられた痕を撫でている様子が目に入る。一瞬そこに行つて自分も確かめたくなるが、すぐに気持ちを変えろ。あなたは自分の過失の証拠である痕跡を積極的に見たくはない。そこでまた一人で警察署の階段を指す。

警察署の中も病院とたいして変わらぬ慌ただしさである。留置所の人物が父親を連れて来てくれるように友人に大声で頼んでいる。若い女が柱の陰で涙を流している。警官がそれらの隙間を縫うように歩いている。その喧噪の中で何人もの人間の視線があなたに向けられる。あなたはそれらの視線を避けるように署長室の前の長椅子に腰掛ける。あなたは同じ長椅子の一番端に座っていた華人の老女に微笑みかける。老女はまるで鳥が辺りを警戒するようにせわしなく周囲に視線をめぐらせている。老女はあ

あなたが同じ長椅子に座ったことに自分ながら驚き、あわてて視線を他に移す。あなたは老女を驚かせるつもりはない。それでタバコを取りだして火をつけ、時間が経つのに任せる。友人のことを考える。今ごろは気楽に寝転がっているだろう。電話をして会いに来てくれと伝えたい。しかし次の瞬間には、幸せな気分で寝ている友人をこんな時間にとたき起こして悲惨な出来事知らせるのを躊躇する。よく考えたあげく、この件は自分一人が関わるべき問題だし、自分のせいで他人を巻き込んで困らせることをせず、自分で解決するしかないと言いつつ聞かせる。

——ああ、何てことだ。参ったなあ。

医師が警察署の階段を上がっていると、誰かを探してキョロキョロする。そしてあなたを見つけると真っ直ぐに向かってくる。あなたには医師が長く待たされて苛ついているのが分かる。椅子に座っても落ち着きがなく、立ち上がって少し歩いたかと思うと、また戻ってきて座るといった調子だ。怒っていらいらし、もつと早く傷の処置をすべきだとブツブツ文句を言っている。

……最後に残りの被害者集団がやって来る。全部で八人である。その集団はあなたを指して近づいてくる。集

団を先導して真っ直ぐにあなたを指して来るのは若い男だ。その目はあなたをまるで親の仇とでも思っているかのように怒りで煮えたぎっている。

「いまに見てろよ。もし親父に万一のことがあったら、そんなときは容赦しねえ」

相手の態度や言葉が本心から出たものであるかを見抜けないので、あなたは態度で何の反応も示さない。

「駄目よ、駄目、落ち着いて。おぼさんの言うことを信じなさい」。四〇を超えているとおぼしき女性が若い男の腕を取って引き戻そうとする。あなたはこの集団の人間のどの目付きにもまったく友好的なものが無いのを感じとり、胸が圧迫されるような重苦しい気分襲われる。

「全員揃いましたか？」例の若い警部が顔を見せ、あなたと全員に親しげな微笑みを送りつつ訊く。

集団の人間はみな黙って頷く。

「どうぞ中にお入りください」と警部は言うのと、くるつと背中を見せ、先導するように先に部屋に入る。最初にそれに続いたのが医師で、次があなただ。それから怪我人が全員、ぞろぞろと続けて入るが、親類縁者は部屋の外で待たされる。あなたは後になって、怪我人たちの到着

が遅れたのは、彼らが携帯電話で親類縁者と連絡を取った後、病院で彼らを待ち、全部揃ったところでいっせいに警察署に向かったからだだったということを知ることになる。

「免許証を出してください」と若い警部があなたに告げる。あなたはズボンの後ろポケットから折り畳み財布を取り出し、そこから免許証をつまんで警部に渡す。相手は免許証を受け取り、ノートに免許証のデータを写し取り始める。早く終えてしまいたいと言わんばかりにかなり急いで書く。時々、手を休めて記載事項を黙読し、それからまた顔を俯けて筆記を続ける。あるところまで来るとテーパーの引き出しを開けて物差しを取りだし、四角い図形を三つばかり描く。頭から突進してぶつかっているその四角い図形が自分の車だとあなたにはなんとなく想像できると……。

警部はノートに記述した内容を確認するように読み上げる。それからそのノートを手にあなたの目の前に来る。

「ここに署名してください」

その際のあなたはまるで聞き分けの良い子供だ。あなたは読みもしないで署名し、ボールペンを相手に返す。

「ドクター、ここにサインをお願いします」

医師はノートを手にして読むと、胸ポケットからボールペンを抜いて署名欄にサインする。

「他の被害者の方々もサインをお願いします」。警部はノートを最も年輩の男性に渡しながら促す。

「困ったな。眼鏡がないんだ。ずっと探しているんだが見つかからない。さっき、息子にタクシーの中を調べさせたんだがなかった。一体どこに消えたのか」。彼はかなりでかい図体に相応しい大きな声で文句を言う。この年配者、五〇歳は超えていそうだなとあなたは見当をつける。頭髪はかなり薄く、頭頂部の二箇所小さめの絆創膏が当てられている。

「ほら、おまえが読みなさい」といって彼は隣に座っていた若い女にノートを渡しながら、「ちゃんと読むんだよ、法学士として恥をかかんようにな」とかんで含めるように言い、向き直って、若い警部とお喋りする。

「孫でしてね。法学部卒なんですよ。今日、修士号を授与されたばかりなんです。わしも田舎から出てきたばかりで。祝賀会をやってあげようと。会場へ向かうところなんです。祝賀会をやってあげようと。会場へ向かうところなんです。……」

祖父にそう紹介された女性はちょうど顔を屈めて読ん

でいるところである。二十歳過ぎに見える。顔の肌は艶々して、耳の後ろと頸で留められた清潔な白い絹のブラウスを除けば、はつきりと人の記憶に留まりそうな特徴は無い。

「息子も一緒だったが、奴さんはわしがどうにかなったんじゃないかと心配して、いまじゃ基本は一人暮らしと変わりはない。連れ合いも去年あの世に行っちゃったし。わしはそれでも……」

この人物の息子だろうとあなたが思っている二人の男は女性の隣に座っている。二人は顔つきや体つきがそっくりだ。髪が縮れているが、どっちが兄でどっちが弟かはなんとなく分かる。兄とおぼしき方は頭を包帯でぐるぐる巻きされ、弟とおぼしき方は左眉の傷の上にガーゼが押し当ててある。この二人こそが、あなたと共に同じ車で病院に運ばれた当人である。タクシー運転手は長椅子の一番端に座っている。華奢な体つきで、表情は常に重い物を背負っているかのように暗い。頭には他の被害者のような包帯もガーゼも見えない。たしかこの男は頭ががち割れたと叫び、友人に代わりにタクシーを運転して病院まで連れて行ってくれと頼んでいたのを聞いた記憶がある。結局、事故の負

傷者はあなたを除いて全部で五人だと分かる。

その五人全員がノートに署名を終えると、若い警部に返す。

「これで終わりです。明日は朝十時にもう一度ここに集まり、賠償金について話し合ってください。今日は帰宅してゆっくり休んでください」。警部はみなに聞こえるように大声でそう伝える。全員が椅子から立ち上がり、ぞろぞろと部屋を出る。

「明日はお金を用意してきてくださいね」と警部はあなたを捕まえ、安心させるような笑みを浮かべて私的な会話を交わす。

「なあと大した事故じゃないし、慌てることなどありませんよ」。

「いくら用意すればいいんでしょうか？」

「それは小官からは言えない決まりなんです。すべては被害者の要求次第です。怪我をした被害者がいますからね。言いにくいですよ。車の損害だけだったら修理業者を呼んで値段が折り合えばそれで一件落着ですが。車の被害だけだったら整備工場の間を呼んできて、修理代を見積もらせれば終わりですが。しかし、今回は人的被害が出

ていますからね。相手がいくら要求してくるか次第です。ま、少し多めに用意された方が良いかと思えますよ……」。警部は小声であなたにそう告げる。あなたはそれから部屋の下アを出る。

……元の長椅子の端に鳥が巢から落ちそうな格好で座っている例の老女に微笑みかける。あなたは一歩ずつ一歩ずつ、ゆつくりと階段を降りる。その一歩ごとに平坦な地面を歩くときより強い痛みが走る。どうにか階段を降りきると、停車中のタクシーの所へゆつくりと歩いて行く。

「出してくれる？もう片付いたから」。あなたは行き先について詳しく伝える。……道路は空いている。

たまに一台の車とすれ違う。

道路照明灯の光は黄色くくぐもっている。

その下を一つまた一つと通過する。

涼しい風が顔を撫でる。

不幸な出来事をすべて忘れようと努める。

「何時かな？」

「午前二時過ぎです」。あなたは視線を車内に戻す。

……タクシーはのろのろとアパートの前の駐車スペースに

入って行く。運転手が先に降りて、後部へ歩いて行き、トランクルームを開ける。それからスペアタイヤ、油圧ジャッキ、蒸留水ボトル、ブレーキオイル、ゴムホースを取りだしてアパートの前に置く。

警備員が顔を出して様子を探る。そしてあなただと分かる時、「なんだ、おたくか……」。口にした言葉はそれだけである。

「これちょっと運んでもらえないかな」。あなたはいつもの声の調子で警備員に頼む。

「待ち時間を入れていくらになりますか？」。あなたは運転手に向き直ってトータルの料金を尋ねる。

「五〇バツです」。運転手はとつと決めていたかのように値段を告げる。

あなたは二〇〇バツ紙幣を出して渡す。「おつりは取っておいて」。あなたには運転手が要求した金額が、たとえ待ち時間など大したことがなかったにせよ、極めて少額であるのが分かっている。

「いや、大丈夫です。お金はあるんで」「五〇でいいです。一〇〇は多すぎます。お宅はもう十分大変な目に遭ったんだし。とても受け取れませんよ」。運転手は最初の金額

を譲ろうとしない。

「小額紙幣がないんですよ、ほら」。あなたは財布を開いて相手に見せる。

運転手は布製財布を受け取る。折り畳まれた小額紙幣の数はいくらかもなく、握られた硬貨の数もいくらかもない。クシャクシャの紙幣を押し広げる。

一〇バツ紙幣が三枚だ。掌を広げて硬貨を数える。それからすべてのお金をあなたの手握らせる。

「本当にこれだけなんだ。おたくの親切にichyamonsをつけるつもりはない」。あなたは心ならずも運転手の好意を頂戴することにする。

「時間を取らせて、本当に申し訳ありませんでした。お陰で助かりました。」

「大丈夫。助け合いはお互い様です」運転手はそう言う
と運転席に座りに、車を出す。

あなたはそのタクシーが門扉から左折して向こうまで去って行く後ろ姿を見送る……

一階の詰所にいるガードマンがあなたの物をエレベーターまで運んでくれる。それからあなたを部屋まで送る。その途中でも色々と訊いてくる。ときおり、あなたは苛立ち、

いちいち応えたくない。日常的にはそこそこの仲のいい間柄だったのに。ただ、今夜に限ってあなたにはそのガードマンがまったく別の人間に感じられる。

あなたはほとんど夜通し、左に寝返りしたり、右に向きを変えたりしてなんとか眠りに就こうとするが、誰かの手で目が見開かれているかのように眠れない。寝ようとしてあらゆる手段を尽くすのだが、それでも少しも眠気は襲ってこない。それどころか、あのドーンという轟音、あの音があなたも幻聴のように何度も耳に響く。

——何てことだ。

——何てことだ。

——夢であつてくれ。

2

目を覚ましたあなたは四角い額縁に囲まれた澄みきつた空を見つめる。毎朝、ベッドを離れる前にあなたは寝転がったまま四角い枠の中の空を見つめる。それは著名な画家が入念に製作した本物の絵と変わりはなく、白い壁の上に並ぶように下げられた額縁の代わりに赤色の窓枠によって囲われている。絵は三枚ともあなたのベッドの足先にあ

る。最初の二枚の上空の絵は網入りガラスのせいで目障りだ。三番目の絵は透明ガラスで、あなたは黎明時だろうが、闇夜になる前に帰宅して見る黄昏時だろうが、空の色の変化が明瞭に分かるこの三番目の額縁が一番のお気に入りだ。季節によつてはこの赤い窓枠の空の光景は雨が透明ガラスを濡らすことで霞み、小刻みに震える。

それからあなたは昨夜の事件のことを思い出し、あつという間に気持ちがへこむ。目はまだ清々しい空を見てはいるものの、気分は逆に落ち込む一方だ。昨日起きたことをあれこれと何度も回顧する。額と顎のガーゼに手を触れる。残念だ。出費が勿体ない。考えるほど気分の落ち込みは酷くなる。頭の血管がまるでいまにも破裂しそうなほどドクドクと脈打つ。

——くよくよと考えてもどうにもならない。もう起きてしまったことだ。もしこうしていれば、ああしていれば事故は起きなかつたに違いない、などと考えてもどうなるものでもない。

大きく溜息をつき、身体から毛布を押しつけようと決心する。起き上がって毛布をたたみ、枕の上に重ねる。シーツをきちんと直すとはラジオに手を伸ばして、音楽を聴く

ためにスイッチを入れる。両方の膝頭はまだ腫れあがっていて痛い。それどころか胸の痛みも更に増しているように感じられる。

あなたはゆっくりと朝の日課に従って動き回る。そして最後にシャワールームの鏡で自分自身の顔と対面する。互いに見知らぬ人物のような感じがするのは変わらない。鏡の中の顔には疲労感が滲み、青ざめている。瞳は憂鬱な光を放ち、額には大きなガーゼが当てられ、皮膚は見えない。顎にも右の白歯にあたる場所から左の白歯にあたる場所まで長くガーゼが当てられている。

——会社で寝ていれば良かった。

——え、どうしてまたそのことを考える？

そのことを考えないように努める。シャワーを浴び終えて出ると、ちょうどタイラジオ放送局からニュースが流れている。お湯が沸騰する音がする。あなたは歩いて行ってプラグを引き抜き、コーヒーをカップいっぱい注ぐ。

普通の日なら、この時間のあなたはもうアパートを出て会社に出勤中だ。だが今日のあなたはまだ椅子に座って時間が過ぎるのを待ちながら、どうやってお金を工面するかその方法を考えている。一方には、親友に電話をしてお

金を借りようかという気持ちがある。だが、昨夜だってその友人に電話するのが憚られたのと同じ理由で、それは駄目だという気持ちもある。この問題はあなた一人の身に起こったことだ。これから休暇旅行に出かけて楽しむもうとしている友人にややこしい問題を抱えさせる訳にはいかない。あなたにはいつでもATMから引き出せるお金がまだある。それにゴールドのネックレスだって一本ある。全部合わせれば、今日の賠償金の支払いには何とか足りるはずだ、とあなたは考える。それで誰かに借金を申し込む電話をかけるという考えを引込める。

解説策を見つけたあなたは椅子に座ってコーヒーを飲み、タバコに火をつける。それから、火曜日にクライアントに見せるレイアウトのスケッチをひっくり返して見る。だが、スケッチを続けようというだけの集中力はない。

ラジオからもうすぐ八時になるという声が聞こえる。もし、あなたが今朝未明に帰省していたら、今ごろ車はまだ県境にある交差点にさしかかっている頃だろう。

あなたは立ち上がると、ゆっくりと身支度にとりかかると。身支度を終えると、もう一度身分証明書を持つていることを確認する。それはいまも変わらず折り畳み財布

に入っている。洋服ダンスの前から立ち去ろうとするとき、ドンドンとドアを叩く音が響く。間断のない叩き方で、かなり焦っているようだ。たぶん部屋を間違えたんだろうとあなたは思う。なぜなら、普段友人が訪ねてくるときは、一階の警備員から友だちという人がこれから部屋に行くという電話連絡があり、分かった、上がってもらってとあなたは答えるからだ。たぶん隣の部屋を訪ねてきた人物だろうとあなたは考える。だが、あなたは会っても笑みを交わす程度で、隣の住民とはそれ以上には親しくない。

あなたはドアの小さな四角窓を開けて廊下を見る。するとアパートの管理人と近所の主婦の二人が立っているのが分かり、中からドアを開ける。

「一体どうしたんです？」とあなた。

「あれ、顔を何かにぶつけたんですか？」。管理人はあなたの顔を見た途端にそう言う。表情を見る限り、その質問はいま思いついたばかりで、一階にいる時から考えていた質問とは思えない。

「車がぶつかって」あなたは元氣のない声で答える。

「ああ、良かった。何か悪いことでもあったのかと思いましたがよ」

「悪いことって?」

あなたは少し気分を害したまま逆に相手に訊き返す。

「いえ、いえ。実はこうなんです」。あなたが不機嫌なのを悟った管理人は、落ち着いた声で説明する。「この奥さんがあなたの部屋の前で塵を拾って見てみたら、あつちこちに血がこびりついたズボンだったらしくて。奥さん、あなたの部屋で何か酷い事件が起きたんじゃないかと心配されて。それで一階の私のところへ来て、心配だから一緒に見に行つてほしいと。それだけです」と言つて管理人は愛想笑いをする。

「それはぼくが自分で捨てたんです」とあなたは主婦に向かつて言う。

「ぶつかったんですか、ぶつけられたんですか?」管理人は話題を変える。

「どこで?」今度は主婦が口を挟む。

「ちよつと失礼します。これから警察署に行くんです」と言つてあなたがドアを閉めると、二人はがっかりした表情になる。

あなたは質屋のドアから外へ出ると、タクシーを止めて警察署へ行くよう告げる。

……今朝は警察署の中の人々の動きは昨夜ほどには慌ただしくない。おそらく人々はまだベッドの中にいて活動らしい活動をしておらず、まだ困つた問題に直面していないからだと思われる。あなたは昨夜も座つた、署長室の前の長椅子に座る。老女はまだ昨日と同じ場所に変わらぬ様子で座っている。食べ終わった後の空のお皿が側に置いてある。

「お婆さん、家はどこなの?」とあなたは微笑みかける。老女の目に恐怖の光が宿り、身を縮めるように柱の方に後ずさりしながら意味の分からない中国語を喋る。あなたは、中国語を理解できる人が彼女と話ができるかどうか不確かな気持ちになる。それであなたはそれ以上彼女を驚かせたくなくて視線を外す。

……時間が過ぎ、十時十五分になったのに被害者はまだ一人も顔を見せない。あなたはそれ以上待つことに苛立ちを覚える。あなたは約束の時間が守られないことに何度も遭遇したことがある。それはまるで国民レベルに共通の性格になつているようだ。あなたはかつて読んだことのある、ある作家の一文を思い出す。それによると、タイ人の時間の約束は農民の生活習慣に由来しており、目の前の

田圃の主である農民は家を出ればいつでもすぐに仕事場に着けるし、少し遅れても差し支えなどないからだそうだ。田圃はどこにも消えないし、機械に依存し、時間に依存する必要がある欧米の発展した産業社会とは基本となる習慣が異なるという。機械が動き出す時間になれば、労働者はそれに間に合うように急ぐ必要がある。そうしないと損害が発生する。……読者もわが国が受け入れた欧米文化を考えてみてほしい。我々が受け入れて有益なものとして使っている文化はとて少ない。

あなたの目が昨夜の若い警部が歩いてくる姿を捕らえる。あなたを見いだした警部は笑顔を寄こす。彼は建物の右翼側から歩いてくる。白の詰め襟服をびったり着こなして、ズボンがカーキ色で、黒の革靴がピカピカ光っている。「早くからお待ちなんですか？」すぐそばまで来た警部が挨拶がてら声をかける。

「ええ。昨夜、十時という約束だったものだから」「傷口、痛みませんでしたか？」

「昨夜より痛かったです」「きつと腫れているんですね。そうだ、申し訳ない。私の手落ちだなんておっしゃらないでくださいよ。昨夜、あな

たは酔っていましたか？」。警部の質問は丁寧で、ぶっきらぼうなところは少しもない。

「酔っていたとは？ 何のことでしょうか、警部？」

「クスリとか、薬物とかお酒とかそんなものですよ。習慣になつているとか？」

「いいえ、全然。本当に疲れ切つてうたた寝したんです」

「大変でしたね」と相手は答える。「ところで、おたくは馴染みの整備工場の人間を連れて来ていますか？」

「いいえ」

「だったらちよつと面倒なことになりますよ」。相手はあなたに代わつて驚いている様子だ。

「被害者側はみな自分の馴染みの整備工場の人間を同伴してきます。その上で修理代の交渉に入ることになります。我々では修理代の金額を査定できないからです」

「そうですか。ぼくはこの手のことはさっぱり知識がないもので」

「本当にないんですね。いつも使っている馴染みのガレージは。お友達の知り合いとかもいませんか？」。警部の表情が本気で心配していることを示している。

「あることはありますが、常連いうわけじゃありません。

場所が近ければそこで修理を頼みます」とあなたは正直に答える。

「だったらこうしましょう。私には知り合いのやっている整備工場が一軒あります。信用の置けるガレージで、私はいつもそこを使っています。高い修理代をふっかけることはないと保証します。だってこの辺りの地元で商売していませんからね。私とそのガレージを紹介しましょう。向こう側のガレージの整備士と交渉ができるように。いかがですか？」

「いいですね。警部が保証するとおっしゃるのなら、どうぞお願いします」。あなたは自分で手配する手間が省けたことを喜んで相手の提案に承認を与える。

警部はガレージのオーナーに電話をかけるためにちよつと席を外す。あなたは署長室へ入っていく警部の後ろ姿を見送る。あなたは一般人がまず出会うことのない警官のイメージを想起しないわけにはいかない。新聞コラムで読んで、他人から聞いたことのある話の限りでは、あなたが描く警察署の中の警官のイメージは、怒り狂ったように怒鳴り、喚き散らす様子だ。だが、あなたは実際に自分の目でそんな光景を見たわけではない。そのイメージとは真逆に、この若い警部は物腰穏やかで言葉も優しく、それ

どころかあなたのように不利な立場にある人間に救いの手を差し伸べている……。

「終わりました。じきに来るそうです」。若い警部はあなたに笑顔でそう言って建物の右手の方に去って行く。あなた一人を華人の老女の側に残したまま。

医者が到着した。彼は一組の男女を連れてきている。二人とも年齢は中年で、男性は肌黒く、年齢に相応しいきちんとした紳士的な服装、女性の方の服装はかなり原色っぽい色で、若作りである。あなたは三人に挨拶の合掌をする。

「はい、おはよう。もしわしの弟に何かあったら、絶対に困ったことになりますよ。この息子が医学部を卒業するまで、仕事に就くまでどれくらいのこと……」

「え、おたくどうなの」。厳粛な顔つきの紳士の声は穏やかで、その様子はあまりお喋りではない感じがする。

「はい。あなたと弟さんにはご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。まさかああなるとは。故意ではないんです。誰だってあんな事故を起こそうとは思いませんからね」

中年男性はあなたの謝罪に軽く頷いただけで何も言わ

ない。

「弟の方は大したことはない。息子の具合が心配なだけです。誰も重傷者が出なかったのはまあ良かったと言えなくもないが」。中年紳士の表情が慈悲心の籠もった温もりのある笑みに変わっている。

「ほかの人たちはまだ来ていないんですか？」と医者があるなかに訊く。

「まだなんです」と言いつつ、あなたは外を見る。駐車場にタクシー運転手が立っているの見える。「あ、あそこにタクシーの運転手さんが来ています」。タクシー運転手は三人の男たちと一塊になってあなたの車をチェックしている。

「お医者さんは車をガレージに持って行って見せたんですか？」あなたは振り返って医者に訊く。

「ええ、済みました」

「修理代はいくらだと？」

「四千バーツ……これがそうです」。彼はメモ用紙を取り出してあなたに見せる。あなたはメモ用紙を受け取ってその上に素早く視線を走らせる。板金、車体前後部塗装、フロントバンパー交換、リアバンパー交換、ヘッドライト、ブレー

キライト……計四千バーツ。

「どうも」と言つてあなたはメモを返す。

「警部の方でこれを先に処理してもらえませんか。そうすれば私は仕事に行ける」

「皆さんが揃うのを待った方がいいかと」。あなたは医師にそう告げて、階段を降りて駐車場に向かう。タクシー運転手があなたの姿を認めて、男たちから離れ、あなたに近づく。

「どうです？」

「まだ分かんらん。整備士がまだ全部のチェックを終わっていないんだ」と運転手は不安そうな声で言う。

「車じゃなく、あなたの具合がどうかと？」。運転手が自分の身体のことより車の方を心配しているせいか、それともあなたの質問が曖昧すぎたせいなのか、あなたには不確かだ。

「ああ、頭がちよつと壊れた感じだ。でも昨日は傷を縫ってもらうことはしなかった。痛いのは厭だから。ところが今朝になったら、胸の方がちよつと痛くなった。肋骨かどこの骨が折れたのかもしれない」。相手は左腕を上げて、胸の辺りにそつと手を触れる。かれの症状の原因は自分と

同じだろう、つまりハンドルにぶつきたからに違いないとあなたは思う。

「今日の話し合いの決着がついたら、もう一度はつきりさせるためにレントゲンを受けた方が良さそうですね。もし内部で問題が起きていれば医者に治療してもらいます。ぼくも痛みがあるんですよ」。あなたは同じ境遇にある相手に笑みを送る。

「おたく、一緒に車を見てくれないかな」と相手はあなたを促して先に立つて歩く。三人のガレージの人間とおぼしき男が車に触りながらお喋りしている。最初の男は大柄な若者だ。肌は白く、目が小さくて、髪は短く、ネイビーブルーのスーツを着ている。二人目も若い。中肉中背で膚は褐色、縮れ毛で両腕に入れ墨があり、ストライプのシャツを着て、下はジーンズだ。三人目は痩せ形で背が高い。頬が窪み、顔は黄土色をしている。かろうじて若者の部類で、長袖を着て、袖のボタンまで留めている。色褪せた紺色のズボンを穿いている。

「どうするんです？」腕に入れ墨をした男が、あなたが来た途端に口を開く。ちょっと風変わりと言えば風変わりな問い方だ。

「こつちのミスだから、お支払いさせていただきだけです。どうしようもない」

「だつたらこうしましょう。うちは自動車整備士を連れてきた。俺らはこの運転手さんがいつも使ってくれている近所のガレージの従業員です」。被害者のタクシー運転手がまだひと言も発していないのに、どうやらこの腕に入れ墨男がすべてを仕切るつもりのようなのだ。

「しっかりチェックしてよ。いくらになりそう？」、あなたは整備士だと紹介された大柄な若者に話しかける。

「兄貴の馴染みの整備士は来ていないの？」。大柄な若者が不審そうな目つきで訊く。

「俺が先に見積もつただろう。お前の見立てはどうなんだ」腕に入れ墨の男が横から言う。

「お前の査定額を聞かせてくれ」とタクシー運転手が念押しのように付け加える。

整備士は車の周囲を動き回り、あつちを触ったり、こつちに触れたりする。

「ほら見える？この辺がかなり歪んでいる」。彼は車体後部の屋根の凹みを指さす。それからぐるっと回り込んで車体前部に行く。そしてボンネットを開けようとするが、な

かなか開かない。三人が集まって、声をかけて一斉にボンネットを持ち上げようとする。

「棒きれを探してきてこじ開けよう」と彼は言う。

四人がボンネットを開けようと悪戦苦闘している間、あなたは二人の男が離れたところからその様子を見ていることに気づく。ときどき、互いに上体を傾けてはひそひそ話をしている。小柄の男の方は様々な色のペンキで汚れたくすんだ白の丸襟シャツを着ている。ズボンの方も似たようなものだ。背の高い方の服装は比較的清潔だ。アンダーシャツが透けて見えるほどの薄手の白い半袖シャツに、薄いブラウンのズボン姿である。二人とも似たような体型で、痩せても太つてもいない。年齢もほぼ同じくらいで、三十七歳、三十八歳といったところか。二人はいかにも興味深そうにボンネットになったタクシー車を見つめている。タクシー車のボンネットが開く。大柄な整備士がこじ開けるのに使った棒でボンネットを支えてから、上半身を屈めてエンジンルームをしばらく点検する。あなたも近くへ行つて覗き見る。みながエンジンルーム内の損傷具合に関心を集中する。「このクランクが折れている」と言つて整備士はその箇所をみなに指で示す。あなたは誰かが自分の腕に触れたのを

感じて振り向く。ペンキで汚れた丸襟シャツの背の低い男があなたに頷きかけ、自分について来いという風に先に歩く。あなたは彼についていく。そして背の高い男のそばまで行く。のっぽ男はあなたに告げる。

「おたくはじつとしていて、向こうに査定させたらいい。こっちはあんまり高くぶつかげられないように抑えた見積もりを出すから」

「あなたたちですね、警部の知り合いのガレージの人とこのは」。あなたは仲間ができたことにホッと安堵する。これまでの経過の中ではあなたはたった一人で問題に向き合うしかなかった。

「そうです」と背の高い方が答える。「普通は、この手のタクシーの場合、うちのガレージは引き受けない。プロの運転手連中はかなりうるさいから。おたくはあつちのやり方をじつと見ているだけでいい。もし安めの見積りがでたら、それはそれでいい。この手のことはこっちはよく承知している。易々とは誤魔化されない」

「お二人にお任せしますよ。こういうことはあまり分からないんで。もっぱら運転だけですから」。あなたはそう言つて二人に媚びを売る。

「まあ、任せてください」。先方はそう言ってあなたを安心させる。

「とりあえず簡単にオーケーを出すのはやめてよ」と背の低い方が言う。「こつちでも査定して、引くべきものは引かせますから。向こうがその額で折り合えばオーケーです。修理代の駆け引きは心配いりません。問題は怪我人が出たかどうかだけです。どうですか?」

「四、五人出ました」

「おお、それはちよつと大変だ」。驚いて相手は表情を変えらる。

「事故の現場はどこです?」

「近くです」。あなたは答えるのを煩わしく思う。

「衝突の原因は?」

「うっかり居眠りをして」

「あのタクシー運転手も怪我を?」。あなたは頷く。この間の話し合いの様子を、向こう側の人間で見ているものがあったかどうかはわからない。しかし、タクシー運転手がこちらへ向かってくるのが見えたので、こちら側では話をストップする。

「旦那、ちよつと向こうで車を見てくれませんか」と運転

手はあなたに告げる。

あなたがついていくと、こちら側の二人のもその後に続く。あなたは向こう側の人間たちのいるところで止まる。だが、こちら側の二人は先まで行って壊れたタクシーの状態を点検している。

「どう、見積もりは出ましたか?」とあなたは向こう側の太った整備士に訊く。

「出ました」

「いくら?」

「あれはおたく側の人ですか?」と立ったままタクシーを見ている二人に顔を向けて太つちよは訊く。

「警部が手配してくれたです。で、そちらの査定額は?」

「まずはそつち側に先に査定額を出してもらってからしましょうか」と先方は言葉を濁して答えようとしない。

「別にそうでなくても。しつかり見積もりお願いします。そちらの見積もりが安かったら、こつちの見積もり額の方を採るつもりでしょう?」。あなたは何とか相手に査定額を提示してもらおうと促す。

「警部の紹介という整備士をこつちはあんまり信用していない。こつちの整備士は俺らが懇意にしている人間で、信

用がおけるんだ。それにガレージの場所が近いので、しよっちゅう修理の様子を見に行ける」。腕に入れ墨をした男があなたに告げる。声色からしてやや不満そうだ。

「とにかく先に額を示して下さいよ」とあなたは応え、続けて「ちよつと待って、すぐ来ます」と告げる。あなたの目が警察署を囲った塀の門扉に近づいてくる被害者の一団を捕らえたからだ。あなたはタクシー運転手のグループから離れて、被害者たちを迎えるためびっこを引きながらその方向に歩き出す。先ほどあなたに大声で呼びかけた男はついて来ない。だが、ほかの人々がその数を増やしつつ歩いてくる。法学部卒という若い女性が幼い男児の手を引いて歩いてくる。一緒に来るのは昨夜もいた中年女性だ。二人の男が昨夜眼鏡をなくしたとぼやいた父親と並んで歩いてくる。新顔が三人増えたということだ。内訳は女人に男が二人。

あなたは両手を顎の前にあげて合掌の挨拶をする。「具合はいかがですか？」

「いかがだつて……この頭だよ。何も考えられんようになってしまった。しよっちゅう目眩がする。昨夜だつてとうとう眠れなかった。娘が睡眠薬をくれたが……それでも」。

年寄りほうんざりだと言わんばかりに頭を振る。

「ええ、一緒に病院へ行きましょう。すぐに医師に詳しく検査してもらわないと。いま車の修理代の見積額を査定中で、終わったら私もすぐ上に行きます……」

それからあなたはまた壊れたタクシーのところに戻る。向こう側はあなたを待ち受けている。まだ何も決まっていないのだ。

「おう、戻ってきた。言つてやれよ」。タクシー運転手が太ちよの整備士に促す。

「いくらですか？ おっしゃってください。怪我人も全部揃ったので、これでやつと片がつきます」。あなたははいっぺんまとめて片付けようと頑張る。

「おたくの整備士の査定額を先に提示してもらえないかな」と太ちよが勿体ぶる。

「そつちが先でお願いしますよ。妥当な額ならそれで折り合います。普通は当方のガレージではタクシーの修理は引き受けてないんで」。あなた側の背の低い整備士がなおも粘る。

「一台丸ごとで二万というところかな」相手側の太ちよが口にした金額は決して高いとはいえない額である。

「ちよと高いな」あなたの予想ではそこまでの額にはならない。

「どこが二万なんだ。こつちの見積もりではせいぜい八千というところだよ」あなた側の整備士が口を挟む。

「八千ぼつちで何ができると？クランクの交換と塗装で消えちまう……」太つちよのその文句が終わらないうちに、

「クランク交換は必要ない。なぜ交換する必要がある。直せば使える。もともと劣化していたんだ。塗装だつて板金を施した部分だけでいいんで、丸ごと塗装することはな

い。それじゃあやり過ぎつてもんだ。お宅のタクシーはもともとおんぼろだったのに、二万も要求されたんじゃ、こつちの旦那も困る」あなた側の整備士は吐き捨てるように

そう言つて顔を背け、不満そうな表情で場を離れる。

「ちよつと待て、クランクの交換は必要だ。そんなに引つ掻き回さなくてもいいだろう」と腕に入れ墨の男が大声

で言う。

「そうだ、それはないよ。お宅からぶつかつておいて、壊れた部品を交換しないなんて」タクシー運転手も負けじ

と大声を出す。

「落ち着けよ。誓つてでたらめは言つてない。査定額は

確かだ。こつちの腕を信じてくれ。これで何年も食つてる。

もし警部の信用がなければ、わざわざ俺たちが呼ばれることはない。信用をなくしては元も子もないからな……」

あなた側ののつぽ男は落ち着き払つた様子でそう言う。相手の整備士は感情を抑えてつ立つたままである。

「しつかり鑑定してくれよ。だったらそつちに任せられるから。普通なら事故車のタクシーの鑑定は引き受けないんだ。セダンタイプを査定するのも間に合わないくらい忙し

くてね。まあ、お願いしますよ。もう一回見積もつて」のつぽ男はなんとか太つちよを説得しようとする。

「もつと安く見積つてよ」とあなたは太つちよに頼む。

「まあまあ、まけさせるから。やるだけのことはやつてみますよ」。腕に入れ墨の男はさつきまでのようなヤクザっぽい言動を引つ込める。太つちよの整備士は何やら考えてタク

シーの方へ戻つていく。みんながそれについていく。

あなた側の修理工は後ろからあなたを引つ張つて、ちよつと離れていてと集団から引き離す。

「簡単にオーケーしないでよ。クランクはもとからぼろぼろだった。向こうが裁判に訴えると言つても、そうはしな

いさ。時間の無駄になる。こういう連中はぶつけられると、

こうでもない、ああでもない、これも交換、あれも交換だと要求ばかりする。だが、向こうがおたくにぶつけた時は、交換しようなんて一言も言いやしない。豚箱に入るつもりかとちよつと脅せば、分かったそれでいい、となる。で、旦那はそれでいいのかい？」あなたは頭を縦に振って了解する。

「この手のことはいつばい見てきた。易々と相手に屈することはない。だが、相手がこつちに譲歩するつもりがなければ、旦那には少し報酬をいただくことになる。ダチがさつき出した見積もりはかなり抑えた額だ。向こうが一万で了解してくれば、それはそれで呑むしかない。こつちの見積もりは確かだ……」

「あの野郎が二万要求したのはやり過ぎだ。なめやがって。あんなの呑むことはない」。こちら側の整備士はまだ怒りを抑えきれないでいる。話がついたという掛け声をあげて相手側に近づいていく。まるで拳闘の試合のゴングが鳴らされて、セコンドがボクサーをコーナーから送りだし、殴り合いが始まるのと同じだ。

「で、そつちの最終見積もり額は？」とあなたが先陣を切り、

「一万五千ぴったり」と相手の太つちよ整備士が答える。

「一万五千だと。こつちが出した八千がいいところだ。儲けはほどほどにしなよ。この旦那はは他にもまだうんと支払いを控えてるんだ。怪我人の治療費も、その人たちの車の修理代もある。少しは同情してくれてもバチは当たらないだろう」あなた側の背の低い整備士はそう言つて相手に切り返す。さつきよりは自信たつぷりで、落ち着き払っているように見える。

「どう、呑める？ 呑めないなら、この件はこつちが引き受けることになるけど」とあなたは提案する。

「それはできん」。腕に入れ墨の男の態度がまたヤクザっぽくなる。

「それはしないでしよう。おたく側の見積もりは高すぎる。物を買うときと同じで安い方を見つければ、おたくもそつちを購入するでしょう、違いますか？ もしおたくが、あのガレージは良くないと思えば、自分の目で監視するでしょう」。あなたも相手はかなり強気で言い張る。

しばらく話し合った後、太つちよは一万という額は受け入れられないと言ひ、振り出しに戻る。そこであとは相手側に好きに話し合わせる。タクシー運転手と腕に入れ墨男

はあなたが受入れられそうな解決策を懸命に探す。あなたは元の主張を繰り返すだけである。最後に相手は当初の要求を引っ込め、クラシクの交換だけに絞る。よく検討した結果、あなたはその提案が妥当なものだと考え、交換を承諾する。駐車場での交渉はそれで終了する。

それからは警察署に移動することになる。全員があなたの来るのを今や遅しと待っている。医者は自分の被害車のそばで母親とたたずんでいる。

「あの車の点検をお願いします。二人が寄りかかっているあの車です。四千でどうかな？」あなたは背の低い整備工に小声で言う。あなたがそばを通ったのを見た医者が歩調を合わせてついてくる。警察署の階段を上がると、七人の怪我人が全員、所長室前の長椅子から立ち上がる。腕に入れ墨男と長袖シャツ姿の向こう側のガレージの人間は怪我人の親族の隣に座る。華人の老婆はいまも元の場所に座ったままだ。

あなたは皆を促して署長室に入る。全員が椅子に腰かけると、若い警部が自分の仕事を始める。

「事故車の修理の話し合いはもう片付きましたか？」と警部はあなたに訊く。

「全部向こうの要求を受け入れました」

「で、こっちの怪我人の皆さんの治療費も払っていただかないと。これから皆さんを検査に連れて行ってもらいます。皆さんの身体に何か異変があれば、あなたに全責任があることになりました」

「ええ」。あなたは頷いて、相手の言を受け入れる。若い警部は昨日のノートにメモを取り始める。

警部が顔を俯けてなにかをしきりに書きつけている間に、腕に入れ墨をした例の男が入ってきて、タクシー運転手を外に呼び出す。しばらくすると、その運転手が戻ってきて今度はあなたを外に呼び出す。

「もう一度やり直しましょうよ。二万ではとても手打ちできません。残りの三千は自分でなんとかしますから……。はつきり言うところちはあんまり警部を信用していいですよ。自分の馴染みのガレージで修理したいんだが。どうかな、一万二千までお願いできませんか。あとはこっちでなんとかしますから」。腕に入れ墨をした男はあなたにそう言う。物腰は幾分丁寧になっている。

「そう言われてもなあ。なぜそっちが三千出すんです」。あなたは相手を簡単には信じられない。

「旦那に同情するからですよ。ほかにも出費がたくさんあるんでしょ」

「さつき了解しあった通りでいきましょうよ」とあなたはタクシー運転手に言う。

「やり直しましょう。一万二千いただければ決着です」と腕入れ墨男は急ぎ立てる。

「さつき決着した一万でいきましょう」あなたは元の値段を言い張る

「いやー、それじゃいくら何でも」と相手は嘆いてみせる。あなたは自分側の整備員が階段を上がってくるのに気づき、近づく。

「さつき言った額でどうでした？」あなたは医者車の修理代を訊く。

「いいね。安くも高くもない。海外の部品は高いし、奴さんの車はまだ新しいからね」とのっぽの男がまとめる。

「タクシーの方からは一万二千と言われているんだけど」とあなたは彼に相談する。

「え、さつき了解したんじゃないの？」背の低い男がまた機嫌を壊し始める。「ああでもこうでもないとうるさいな。聞いてやることはない。くれと言うんだったら一万

ポツキリだ。決めた通りでいこう」

「ええ」あなたは相手に笑顔を送る。

「これから旦那の車を牽引する車を調達してくる。お前はここにいてくれ」と彼はより清潔な服ののっぽの男に告げる。

……署長室に戻る前に、あなたはタクシー運転手に告げる。

「折り合った額でいきましょう。そちらで相談し合せて」。それから署長室に入る。若い警部はまだメモを書き終えていない。

椅子に座っていくくらは経たないうちに、タクシー運転手がやって来て隣に座る。

「なんとかあと五百上乗せしてくれませんか、レッカー車の運転手の手間賃です」と彼は囁く。

あなたは何時までも終わらない交渉に苛立ちを覚え始める。最初に立ち戻って考えると、相手は初めは二万要求してきた。次に二万五千に値下げした。最終的には一万でということを決着したが、向こうはさらに一万二千を提示してきた。それでもあなたが譲らないと分かると、相手はそれに応じたが、付帯条件としてレッカー車の運転手代

に五百を要求してきた。そうならば、彼らは最初からあなたから一万を余計にむしり取るつもりだったということだ。

——でかすぎる、とあなたは思う。

「いったん決着した額でいきましょうよ。修理はこっち側のガレージでやればそれで一件落着だ」あなたは小声ながら決然とした物言いですう告げる。

タクシー運転手は押し黙る。それから、立ち上がって部屋から出る。警部は顔を上げてその様子を一瞥し、またうつむいて筆記を続ける。

あなたはなぜ彼にあとたつた五百が渡せないのか自分でも理解できない。それぐらいの額なら渡してしまえば、連中との煩わしい交渉からそれだけ早く解放されるというのに。しかし、一方ではまた自らにこう語りかける。どっちにしても駄目だ。たとえ百まで下げてでも駄目なものは駄目なんだ。あなたは自分にそう念を押す。

タクシー運転手が戻ってきて、またあなたの隣に腰掛ける。

「一万でいい。分かったよ、だから……」と彼はあなたの耳に未練がましく囁く。

「駄目だぞ、自分のやり方でやるんだ」あなたは覚悟を堅持しろと自分に命じる。一方で、あの程度の額をどうして断ったのか、あなたは自分自身が分からなくなる。あなたからのさらなる返答がなくなったことで、相手は失意を抑えることができなくなったようで、表情にそれが映し出される。タクシー運転手は顔を俯けたまま、一言も発しない。

「よし、ここにサインして」と若い警部がノートを差し出す。受け取ったあなたはすべての項目に目を通す。それから署名して、次の署名者である医者に渡す。

「いま払ってもらえませんか。そうすれば急いで仕事に行ける」医者はあなたからノートを受け取りながら言う。彼が前向きになって記述を呼んでいる間、あなたは財布から紙幣を抜いて数える。医者はサインを終え、次にタクシー運転手にノートを渡す。

「ここに四千あります。確かめてください」

「オーケーです」医者はあなたに微笑む。「……それでは、これからあなたは怪我人を病院での検査に連れて行ってください……」と言って、警部は怪我人の姓名を書いたメモをあなたに渡す。それから部屋を出て行く全員に一人ずつ

つ別れの挨拶をする。

医師がいなくなると、タクシー運転手が口を開く。

「警部さん。俺の車の修理代、こちらの兄さんは一万払うと言うことで片がついたんだけど、車は俺の方で引き取って直したいんだけど」

「おいおい、さっきの話し合いでは修理はあなたの知り合いのガレージに頼むってことじゃなかったか？」と若い警部はあなたに向かって言う。

「ええ」とあなたは頭で頷く。

「おいおい、じゃあ、どうするんだ？」警部はあらかじめ不満そうな表情を見せる。

「どうするって。話し合った通りにしますよ。こっち側のガレージに任せてもらうってことで」

「おたくね。先方は自分で引き受けると言ってる。先方がどこのガレージで直そうが、それは加害者側の権利だ。おたくは先方を縛ることはできない。もし、そのガレージがきちんと直さなかったら、私に訴えてくれ」警部はタクシー運転手にそう告げる。

「じゃあ、警部、ここにクランク交換が必要と一筆書き加えてください。でないと署名しません」

警部はあなたの顔をまじまじと見る。

「いいですよ。さっきも交換に同意するとこの人に言ったばかりですから。警部がそう書き足すのは構いません」

若い警部はノートを引き寄せると、枠外に但し書きを加え、タクシー運転手にサインするよう突き返す。

「で、修理はいつ終わるんですかね。長くなると、こっちも困る。その間の売上げがなくなるからね」

「あのな、心配するな。治るまでは代車を借りたらい。台車が見つからなければ訪ねてきてくれ。私の方で探してやる」警部はまたいらだち始める。

「いつ終わるのかその日を知りたいだけです」

「まあまあ、待って」警部は部屋を出ると、すぐに服装のきちんとしたのっぽの男を伴って戻ってくる。

「タクシーの修理はいつ頃終わる？」警部は尻をまだ半分も椅子に下ろしきつていないうちに整備員に訊く。

「一ヶ月かな。今日は何日だっけ、十二月二十五日だよ。じゃあ、一月二十五日だ。もしそれまでに終わらなかつたら。損害料を払う。保証のために署名するから、俺に請求してくれ。警部には関係ないし、責任を押しつけることはしない」。彼はいかにも剛毅を気取ってそう言う。

警部はもう一度但し書き書き加え、運転手にサインさせる。整備員は背中を見せて歩き出すと同時にふとあることを思い出したように足を止める。

「えつと。これを受け取っておいて。ガレージでの修理の話は明日でもいいでしょう。こつち側を先に片づけさせてください」彼は笑みを浮かべて整備工場の名刺をあなたに渡す。

「とつておいて。何かの時に立ち寄っておたくの車の修理状況を見れるように」。彼はタクシー運転手にそう告げ、名刺を渡して歩き出す。

「済みましたよ、警部」ドアの所まで歩いたところで彼は振り返ってそう言う。

「おお、ご苦労さん、助かったよ」若い警部はそう言うって別れの合掌をする。それからノートを怪我をした乗客に渡す。「サインをお願いします」

「ウーン。眼鏡がないと本当に困る。ほれ、うちの弁護士さん、読んでくれ」高齢男性はノートを孫娘に渡す。部屋の中がシーンと静まりかえり、彼女が注意深く仔細に読んでいるのを見守る。しばらくして彼女は顔を上げて老人に言う。

「お爺さん、みな病院に連れて行ってもらえるということだけど、賠償金についての話はまだ全然ついてないですよ」

この時、全員が固唾を呑んで黙りこくる。一言も発する者がなく、一人もサインしようとはしない。そこで若い警部は重苦しい雰囲気に耐えきれなくなり、老人に尋ねる。「で、お爺さんはどうお考えです？」

「こういうことじゃ。わしとこの息子たちは……」彼は二人の若い男の方を指さす。「田舎から出てきていて、今日中に帰ろうと思っていたが、できなくなつた。それもこの人の車にぶつけられてみな怪我を負つたからだ。わしは家で商売をしていて、帰れないと商売に差し支えが出る。はつきり言つて、わしの商売はかなり儲かつている。毎日の売上げを計算すれば、怪我が治るまでには相当な額になるだろう。だが、この人に同情はするよ。どつちも運が悪かつたんだ。あなたにはわしに同情してもらつて、慰謝料の支払いをお願いしたい。損害賠償金じゃない。それだとまた別の計算になるだろうから……」

「どうして先それを言ってくれなかつたんです。そうしたらまたノートに書く手間が省けたのに」。警部は相手をな

じるように言う。

「警部さん、大丈夫だよ。さっきのタクシー運転手さんの時と同じように枠外に但し書きすればいい」

「それで、親父さん、いくら要求したいんです？本人に言うて下さい。この手のことは当事者同士で決めて下さい。両方が満足のいくように……」若い警部はそう言うのと、話し合いが終わるのを待つように椅子の背もたれに身体をあずける。

「こういうケースでは慰謝料を出すのが普通だ。ただ治療費を出すと言うだけじゃなくて。治療費だけだったら、わしは棒であんたの頭が壊れるまでバシッと叩いてやる。そうしてほしいかね？」老人は振り向いてあなたにそう告げる。

「おいおい、そんなことをしたら、お爺さん、あんたを傷害罪で逮捕しなくちゃいけなくなる。今回のケースは事故なんです。慰謝料とは全然別の問題だ」と警部は笑いながら警告する。

「へへ、たとえ話をしただけじゃよ」と老人はケラケラ笑う。

「こうしましょう。慰謝料はいくら必要なんですか？」あなたを両者の間に割って入る。

「わしの分は二千。眼鏡も作り直す必要があるし、息子と娘には一人千でお願いしたい。これは慰謝料で治療費とはまた別だ」。年寄りはいままで商人が確かな原価を承認しているかのようにすらすと数字を並べる。

「こつちにも慰謝料は千でお願いしたい。こつちも同じように怪我をしている。代車で仕事ができるようになるまで最低でも二、三日はかかる。その間も妻子に飯を食わせてやらねばならない」とタクシー運転手が要求する。

「そうじゃ。その通り。収入が途切れるんじゃないからな」と老人は運転手に相づちを打つ。

頭の中で数字がぐるぐる回って何も言えないあなたを含め、全員がしばらく沈黙。

「どうですか？おたく払えそうですか？払えないようなら交渉して結論を出して下さい。大丈夫。結論が出ますよ……」警部はあなたにそう諭す。まるで「おたくの目、ぐるぐる回ってますよ」とでも言わんばかりに。全員の見線があなたに集中する。いまはあなたが彼らの期待を一身に担っている人である

「こうしませんか、親父さん。半分にまけさせて下さい」「どういふことだ。意味が分からん！」と相手はあなた

の顔を見つめる。さらに説明を欲しがっているようだ。

「こういうことです。親父さんの言い値だと全部で五千で、それを半分の二千五百、運転手さんの分の千が半分で五百ということでしょうか……」

「そういうことですよ。皆さん、この方の身にもなつてください。この方にはまだまだたくさんのお出費が待っているんです。皆さんの治療費もそうですし、他の車の修理代もある。親父さんの怪我は見たところ軽傷のようだし、歩いていてちよつとつまづいて転んだということでしょうか。若い警部が調停役を買って出る。」

「お前たちはどうなんだ？」と年寄りの子供や孫に向き直つて相談する。息子が少し頭を縦に振つたのをあなたは見逃さない。

「こうしよう。お互い様だ。わしの方はメガネ代の五百だけつてことで」年寄りはいかにもあなたを哀れんでいるといった様子で微笑む。

あなたはそれで了解というように頷く。もうこれ以上の交渉は勘弁してという気持ちだ。

こんな消耗なこと、頑張るだけの価値があるのか？話をさつさと終わらせよう。

——もううんざりだ。

「薬代と昨夜の治療費だつてまだもらっていない」と老人はまた済んだことをほじくり出す。

「いくらです。すみません、昨夜は本当に知らなかったんです。頭がぼーつとしていて。部屋を出たところで、警部に警察署に来るように指示されて」この時あなたははじめてあることに気がつく。「こっちは一粒の薬も飲んでいません。親父さん、薬代はいくらですか？」

「いや、気にせんでくれ。ちよつと言っただけだ。助け合うのは当たり前さ」老人は笑い飛ばす。

「払いますから計算して下さい。このことで恩を着せられても困ります」あなたはできるかぎり最も落ち着いた物言いで話す。

「いや、そんな元々つもりで言ったんじゃない。つい口にしただけだ……」老人の声は慰めるように穏やかである。

「よし決まった。おたくは被害者に解決金を払ってください。そうすれば話し合いは一件落着です」若い警部が間に分け入って言う。

……罰金を含めて互いに了解した金額を支払った後、全員が署名に応じる。警察署の中での交渉はすべて終了し、

若い警部のノート内の記述がその決着内容の証拠となる。

あなたは警察署の階段を降りる。一段、づつ降りているとき、両膝にこれまでと同じズキズキという鋭い痛みを感じる。あなたのその痛みを感じることが出来る人は回りに誰もいない。その感覚を理解できる人は誰もいやしない。それはあなた個人に属することである。限界はあってもあなたはその痛みを誰かに説明して聞かせることはできない。しかししよせん他人事であり、聞いた人がその痛みを我がごとのように感じることは絶対にならない。その人物がかつて同じ痛みを味わったことがない限りは。

あなたはこっそり彼らの様子を盗み見る。あなたのようにびっこを引いて歩いている人はいない。だが、あなたの歩みが遅いせいで、階段を降りる速度も遅い。この連中がどこへ行くにも決して見失わないぞとでもいうようにあなたの後をびったりついてくるのをぼんやり考えると、なぜかうんざりだした気持ちがおこみ上げてくる。おそらくあなたは考えすぎているのかも知れない。なぜなら、どっちにしても彼らはあなたの後ろをついて来ざるを得ないからだ。実際のところ、互いの関係はまだすっきり切れたわけではないのだから。かれらはとても静かにあなたの後をつ

いてくる。時には小声で何かを話す声が聞こえる。その話の話題は相談事なのか、それともあなたが彼らを検査に連れて行こうとしている病院についてなのかは不明で、あなたの耳にはその辺りがはっきり聞こえない。

あなたの念頭には一番近い病院がある。そこで彼らの身体内の怪我の具合を検査してもらうためである。心中では、もしもこのうちの誰かに大きな損傷が見つかって一ヶ月、あるいはそれ以上入院する必要があるときたりしたら……という不安がある……。あなたはぼんやりした頭で、この種の話はどこかで聞いたことがあったことを思いつく。車にぶつけられたある男性の話だ。外見上は歩くことも跳びはねることもでき、どこと違って異常なところはどこもなかった。しかし、病院で検査したところ、医師は入院治療の必要を説き、入院後数日であつという間に亡くなった。

もしも今回、そのようなことが起きたら、あなたはどうかすればいいのか。あなた一人で全責任を負いきれるのか。事態は恐らく明確な関係のない人にまで拡大するに違いない。誰も困らせたくないという希望は捨てなくてはならないかもしれない。他人も大変な事態に巻き込む必要が出

てくるかも。問題を起したのはあなた一人だけであつて、その人々は何の間違いも犯していないのに。それともその人々があなたの親類縁者でなかったことが間違ひであつて、そのせいであなたと一緒に苦しまなくてはならないというのか。

——まあ、そこまではいかんだろう。今のところはお互いに笑顔で対応できている。あなたは老人をチラッと見て、自分を慰める。

——何てことだ。

……歩いてきた全員が道路の脇まで来たところで、あなたの周囲に立ち止まる。その前を通過する車に乗った人々が三々五々、こちら側を振り返る。たぶん、こちら側の全員が包帯やガーゼをしているので、それが人々の関心を誘うのだろう。

腕に入れ墨の男と白の長袖シャツの男はここで別れて帰って行く。その前にあなたはタクシー運転手が百バーツ札を腕に入れ墨男に渡すのを目撃する。怪我人の親戚団である女一男二人はタクシーを呼び止めて先に帰る。残った人々はあなたを囲んで立っている。

「どの病院で検査してもらったらいいのかしら？」法科大

学院を卒業したばかりの若い女があなたに相談を持ちかける。

「○△病院に行きましょう」。あなたは昨日傷の手当てをしてくれた公立病院の名を出す。

「え、その病院ってちよつと時間がかかるんじゃない。そこだったら検査結果が出るのに反日はかかっちゃう。近くで私立の総合病院を探した方が良くない？」。その娘の母親でもある女が意見を挟む。その声色は本当にあなたの親類の叔母さんとそっくりだ。

時間がかかることはあなた自身も承知しているが、安い診察費や治療費のことを考えてあえて選んだのだ……。

「ええ、ちよつとは時間がかかりますが。でも診察費は節約できます。それに確かな診察結果が得られますから。時間はかかっても、その病院の方がいいかなと……」。あなたがそう頼んでいるとき、老人の大きな声が響く。

「おー、わしはもうずっと朝から時間を無駄にしてる。わしだって早く検査してもらいたい。それで何もなかったら田舎へ帰って休める。だがいまはなぜかずっと頭が痛い。どうなっているか一刻も早く知りたくて焦っておるんじゃない。この年寄りにも同情してくれんかな。少し高くて、時

間を金で買うと思えば安いものだ。みんなにもその方が好都合だろう。わしの子や孫たちも助かる」

あなたは怪我人の提案に黙り込む。またこんな問題が起きようとは予想もしていなかった。

「どうなんじゃ？」

あなたが長く沈黙考しているのを見た老人が急かす。全員の目があなた一人に注がれ、返事を待ち受けている。その視線を見る限り、あなたには選択の余地はない。そこであなたは提案を受け入れる。

……二台のタクシーが警察署前の道路脇から出る。最初のタクシーに乗っているのは運転手と二人の怪我人の青年、あなたが乗った二番目のタクシーには老人が前に座り、後部座席には、真ん中の主婦を挟んであなたと若い女がすわっている。その女の膝に男の子が座っている。タクシーが私立総合病院へ向かっている間、あなたの胸では刻一刻と不安が高まる。

「おたく、お仕事は何を？」と夫人が話しかける。

「広告代理店勤務です」あなたはあまり積極的に答えたくない。

「何の広告です？」

「依頼してくるクライアント次第です。あのー、親父さん、昨夜一緒だった男性は今日は一緒じゃないんですか？」あなたは前の座席に座っている老人に訊くことで、主婦に答える側の自分の立場から逃れる。

「あいつは仕事に行つた」老人は振り向いてあなたに答える。

「あの子はせっかちだから」母である夫人があなたに言う。「良かったわね。昨夜、あの子はパーティーに行かなかつたから。もし行つてたら、いまごろは病院で大ごとかもよ」といつて女性は軽く笑う。おそらく息子のことを思い出しているんだろう。

「この手のことは説明が難しいです。はっきり言うと、ぼくは誰かを困らせようとわざとやったわけじゃなくて……」

「昨夜は私のいうことを聞いて出かけなければ、問題は起きなかつたのよ」と若い女が口を開く。

「あのときはもう出かけていて……」と老人は後ろを見て言う。「上の子が洋酒を忘れて、いったん戻つて取つてこなくちゃならなかつた。それでもう一度出発したら、今度はカメラを忘れてることに気づいて、それも取りに帰っ

た。この子は、行くな、今日はなんだか運が悪いからと言
たが、誰も信じなかった。最初から信じていたら、痛い目
に遭わずにすんだかもな……」

「この子はものすごく怒ってね。昨夜はみんな死んでしま
えば良かったんだと言ったよ」母親の女がつけ足した。

「もしも洋酒やカメラを忘れていなかったら、事故には
遭わなかったかも。本当に摩訶不思議だ。行かなければ
ならんときに限って忘れるんだから。まったくついてない
……」老人の言葉は最後は呟きになっている。

あなたは言いたいことが喉元まで出かかって、口がムズ
ムズする。それは「もし昨夜会社で横になっていれば、親
父さんの車にぶつけることもなかったし、あの医師が友人
を送っていなかったら、やはりぼくの車にぶつけられるこ
とはなかった」だ。だが、それを言ったところで、状況は
何ひとつ良くなるわけではない。問題が起きてから、人は
いつもその原因について一言言いたがるものだ。

「これも運命だったのよ。ごちゃごちゃ考えても仕方ない
わ」と母親である女性がまとめる。「娘が学位記を受け取っ
たのが昨日で良かったわ。もし今日だったら、撮った写真
を見てみなびつくりよ。包帯姿で王様から学位記を受け

取ることになっていたかもしれないだから……」

あなたは夫人の話を聞きながら、客間に飾ってあるで
あろう学位記授与の写真の思い浮かべる。

——そうだよな。きつと変わった写真になっている。

「でも、誰も重傷でなかったのは不幸中の幸いよ。厄払い
をしなくちゃと思うの。少しお金がかかっても、そんなの
を惜しんじや駄目。身体さえ丈夫であれば、お金はまた
稼げるんだから。厄災を終わりにしましょう。あなたも
聖水を身体に振りかけていただいて、厄払いをしなさい。
そうすれば幸運が訪れるわ」と夫人は娘に勧める。あな
たは微笑むことも、何か答えることもしない。

タクシーはスピードを落とすし、ある総合病院の前の歩道
にびつたりと止まる。あなたは料金を払い、ドアを開け
て外に出る。先に出発したタクシーの乗客はみな降りてあ
なたの到着を待っている。あなたはそのタクシーに近づき、
運転手に料金を払う。

それから戻ってきて、怪我人たちの集団を病院内に案
内する、ガラス製のドアを押して中へ入る。エアコンからの
ひんやりした空気があなたの頭から足までをすっぽり覆
う。この病院の中は、あなたが到着するまでは恐らくシー

ンと静まりかえっていたと思われ、三人の看護婦がカウンターの後ろに座っているのが見えるだけだ。三人はほぼ同時に顔を上げてあなたを見る。あなたはカウンターに近く。その間、怪我人たちは勝手に歩き回って患者用の休憩室の椅子に座る。

あなたは用件のあらましを三人の看護婦に告げる。三人ともすぐに事情を呑み込んだ様子である。看護婦は診察カードを作るためにあなたの姓名と住所を尋ねる。それから三人のうちの一人があなたをレントゲン室に案内する。

看護婦がX線撮影を準備しているとき、彼女もまた衝突事故について知りたがる人になる。事故はどこで、何時、どんな風にといつた感じた。あなた自身は質問を煩わしく思う気持ちを押しとどめる必要がある。とても煩わしい質問なのに、世間の、礼儀作法、という言葉思い浮かべることで。そうこうするうちにX線撮影は終わる。撮影室から出る時は、素潜りで息を止めた後、ようやく水面に顔を出したのと同じ気持ちだ。

老人があなたと交代するように部屋に入る。あなたは患者用の休憩所に戻って椅子に腰掛ける。その間、別の部

屋では怪我人の傷の手当てが行われ、たえず人が出入りしている。

あなたは座ったまま、自信のない筆記試験の結果を待つ人間のように、尋常でない心理でX線撮影の結果を待っている。怖いのは、誰かに外見からは分からない異常が見つかった場合、あなたには治療費を払う能力があるかないかであり、あるいは今日の被害者全員分の治療費ですら財布の中の残金で足りるかどうかが不確かだからだ。この病院内部の豪華さを感じさせるムードは、「おまえさん、入ってくる前にちゃんと懐具合と相談しましたか？」と絶えず囁きかけているように思える。

——ままだ。まだお金の工面で悩むんじゃない。いざとなればなんとかなるさ。

あなたはそう言って自分を慰める。いざとなった時、どうやったら問題を解決できるのか不確かなままに。

しかしあなたには一つの確信がある。どんな問題もつねに何らかの解決策があるということだ。たとえ、その解決策が前もって考えていたことではないにせよ。

……全員がまだ静かに座っている。新聞を読む者、雑誌をめくる者もいれば、ぼんやりと天井を見上げている

者もいる。その様子はまるであなたと同じ教室にいる生徒たちと変わりはない。みながぼんやりと検査の結果が出たのを待っているのだ。その一見閑然な光景は重苦しさを打ち消してくれる。

大人たちと緊張感を共有していないのは、男の子ただ一人だけである。彼は好奇心であっちの部屋に頸を突っ込んだり、こつちの部屋をのぞいたりと一時も休まずフロアを駆け回っている。

看護師がドアから出てきてあなた傷の手当をするからと処置室に招く。あなたは立ち上がってその部屋に歩いて行く。子供があなたの後ろを追いかけてくる。彼は他人を人見知りして尻込みする子供のようには見えない。

「来なさい、早く」とあなたは笑顔で誘う。子どもはあなたを信頼している様子だが、若い女の声が男の子を引き戻す。

「こつちに来なさい。遊んでないで。そこは入っちゃ駄目。いまにお医者さんに掴まってお腹を開けて腸を抜かれるよ」

……あなたはベッドの上に横たわる。額のガーゼが取り除かれる前から若い看護婦がいくつか質問する。あなた

にとつては何度も繰り返された、いつものうんざりする質問だ。どこで衝突したのか、衝突したのは何時か。あなたは治療には大して必要じゃない質問だと思いつながらも彼女の質問に答える。それでもあなたは疑問なしとしない。

返答をもらった彼女らは人生で何かいいことが起きたのだろうか。それは新聞で事故のニュースを読んだり、テレビのニュースで知ったのとそれほど変わらないのではないか。読んだり観たりしているときは興奮したり、少しは同情したりするかもしれないが、それらの事故のことは、時間の経過とともに彼らの脳裏では次第に薄まっていくのではなからうか。あなた自身とは真逆に、これらの質問はいつも事故を起こしたあなたへの警告を重ねているのと変わりはなく、自分の中では忘れたことを忘れさせない。

看護婦はあなたの傷の手当てを終える。彼女が後ろ向きになって傷口に充てるガーゼを用意しているとき、あなたは彼女にガーゼのサイズは可能な限り小さくしてくれと頼む。できるだけ小さいガーゼであるほど、あなたの傷に対する他人の関心がその分減るかもしれないという思いがあるせいだ。

だが本当を言えば、彼女はガーゼのサイズを小さくす

ることはできない。なぜなら額の大小の傷は、あちこちにあるからだ。それは割れたガラス片があなたの額に深く食い込んだ結果である。

……全員がX線撮影と傷の手当を終えた。残るのは一つだけ、つまりX線撮影の結果を知るために待つことだけである。穏やかな気分で見られる者は誰もいない。外見上は何もないとはいえ、内ではあなたと同様に不安を抱えているに違いないという確信があなたにはある。ある人は焦点の定まらない視線を前方に投げかけている。あなたの視線はたびたび他人の視線と交差し、その度にあなたと相手は微笑を交換する。その微笑には特に意味はないから、考えればおかしなことだ。何でもなく微笑を交わす。ちょっと前までは互いに相手の血肉を少しでも多く食おうと睨み合っていたというのに。

老人はあなたの隣の椅子に腰掛けている。彼は呼吸の度にフーフと元気ではなさそうに音を出して息を吐く。いまにも恐れていた症状が起きるのか、それとも彼はいつか言っていたように待つことで時間を費やすことにうんざりしているのか、あなたには確信がない

「親父さん、具合はどうです？　痛みは治まりましたか？」とあなたは訊く。

「まだだ。これから医者に訊く」。相手の声が少し震えている。たぶん、恐怖に由来するのだろうとあなたは推測する。そこで、話をする材料を探そう、少なくともこの老人の神経の緊張を和らげることができると話そうとあなたは思いつく。

「すみません、親父さん。朝方は、商売をしていると伺いましたが、何を扱っているんですか？」

「ミシンだよ。それと防水シートも……」と返事をした

老人の声にはある種の誇りが籠められているように感じられる。

「店舗はどちらに？　市内ですか？」

「自宅が店じゃよ。だが大抵は店頭では商つていない。田舎に販売に行くことの方が多い。辺鄙な田舎に住んでいる農民たちだ。そこへ出かけていつて売る……」

「それはまた、親父さんの年齢では疲れるでしょう。担いで田舎まで売りに行くのは」

「担いでは行かん」と老人は笑う。たぶんあなたが言った、

「ラックに積んでいく。だが、たいていの場合、わしは行かず、

息子に行かせている。わしは歳を取ったし、家で経理をしていることの方が多い」

「どこのメーカーの代理店ですか？」

「いや、どのメーカーの代理店でもない。バンコクに出向く機会がある時に、商売道具を仕入れていた。クロートム市場は中国製のミシンをたくさん商っている。メーカー名をタイで勝手に付けたやつだよ」

「儲けはどうです？」

「いいさ。農民連中にはミシンの知識はまるでない。わしらは家にミシンを持ち込んで縫ってみせる。うちの値段は有名メーカー産よりずっと安い。それでもちゃんと縫える。壊れたら、わしらはただで修理を引き受ける。ただし、交換部品代は取る。一軒の家に売れると、ほかの家も欲しがらる。そうなればしめたもので、飛ぶように売れる人間というのは、人が持つていたら自分も欲しくなるものだ……」

「てことは、親父さん、大変な資産家じゃないですか」あなたは言葉に出して誉める。

「だから朝方言ったはずじゃ。無くす時間を考えれば、ずっと高くつく。本当に損害額を計算すれば、千や二千じゃ

どうにも追いつかん……」相手はあなたの目を見てもう一度ニヤツとする。その笑みには内部に隠れているかも知れない痛みの痕跡など微塵もない。

「……雨季になると防水シートの販売に行く」老人は自分の商売の話続ける。

だが、あなたは逆にそれ以上は訊きたくなくて、耳を塞ぎたくなる。先方が語っていることが、あなたの思いや感情を逆なでし、いらだたせるからだ。幸運なことに、相手がいくらも話さないうちに看護師が出てきてあなたを診察室に呼ぶ。診察室では、医師がX線撮影のフィルムを電灯越しに見ている。あなたは椅子に座って待つ。しばらくたつと医師は振り返ってあなたに告げる。

「問題はありません。すべて正常です」

その声があなたにはまるで天国が地獄の淵から自分を無事に引つ張り上げてくれたように思える。ほかの怪我人もおそらく無事だろうという自信が生まれる。何よりも一番症状が重いのはあなただからだ。あなたは清々しい気分です診察室を出る。歩行の姿勢こそ相変わらずさこちないが、心の内は満面の笑みで溢れている。

全員の視線があなたに集まり、あなたはまるで、合格

した。と言わんばかりに笑顔を返す。……それからはあなたが予測していたように進み、全員に問題なしの診察が下る。全員が外部から分かるわずかな負傷を負っただけに過ぎず、あなたが危惧していたような危険なレベルの内臓の怪我を負った人はいないことが判明する。あなたにとっての世界はまた陽気さを取り戻す。

カウンター向こうの女性スタッフがあなたを呼ぶ。女性の柔和な声と微笑は検査費、処置費の請求であることを意味している。それに薬代とX線撮影代金を合わせると全部で二千五百バーツである。あなたには値下げ交渉の権利はない。それが患者の守るべき礼儀であり、病院で治療費を値切るのは非常識だ。

女性は領収書が必要かと訊いてくる。あなたはそんな紙切れを何に使うのか分からない。この病院では少なくとももう一枚の紙くらい紙を無駄にしてもいいのだろうと思うと、急に欲しくなつて頭で頷く。それから数枚の紙を掴んで相手に渡す。

「請求できるんですか？」相手は不思議な表情になる。

「書いて下さい。」あなたは期せずしてやや命令調の威張った感じで言う。おそらくは朝からあなた自身が他人から、

命令されることが続いたせいで、幾分、気が立っていたせいかもしれない。看護師は全員に毎日傷口の消毒をする必要がある、合意事項の通りに全員の抜糸が終わるまでは、あなたが毎夕、全員分の傷の手当ての支払いに病院に来なくてはならない、合意書に従つてそれがあなたの責任だと繰り返し念を押す。

総合病院を出る前に、人々はあなたの勤務先住所と電話番号を尋ねて控える。ちょうど同窓生たちが別れ別れになつて社会に出て行く前に友情ノートに控えるのに似ている。

あなたは誰の住所も控えない。誰がどんな名前なのかさえ知らない。

いよいよお別れという時になって、老人が、一度くらいみんなで食事に行くべきだと提案する。その理由は、いつまた会えるか分からないからだといいことらしい。皆はそれに賛成する。しかし、あなたはあまり気が進まない。

「ぼくはあまりお腹が空いていませんし、急いで整備工場に行つて事故車の様子を見ないといけませんので」

「一度だけ食事をご一緒にしましょうよ。そんなに時間はかかりませんから」

「ありがとうございます。どうぞ皆さんでそうしてください」

あなたは合掌の挨拶をして全員に別れを告げる。あなたはこの合掌の挨拶をあなたと彼らとの間の最後の挨拶にしたいと思う。別れる前のプログラムとして一緒に食事をするという約束は、警察署のノートにあなたが合意し、署名した了解事項には含まれていない。そうでなければ、あなたには誘いを断る道は残されていなかっただろう。

全員と別れて歩いていると、タクシー運転手が、「もう一度お会いすることになりそうですね、どっちにしろ修理工場に車を見に行く必要がありますから」とあなたに語りかける。

……あなたは一人で道路を横切つて、バス停で乗り合いバスを待つ。バスを待っていた人々があなたに関心を向ける。やってきたバスに乗って腰掛けても、車内の乗客はやはりあなたが気になるようだ。あなたはそこで他人の視線に息が詰まるが、じっと我慢しているしかない。

目的地に着く。バスから降りて、飯屋を探す。

はつきり言えば、あなたも彼らと変わりはなく、お腹が空いていた。だがその時咄嗟に思いついたのは、ひとり

で静かに食事をしたい、そのうえで自分の食べた分だけ支払うほうがいい、というものだった。過ぎ去った出来事が、いつも小銭を出すのを避けることをあなたに学ばせ、そこでああなたは彼らと会食しようという提案を断つたのだ。

タイ麵をお腹に収め終わると、あなたは整備工場の名刺に印刷されている地図に沿って路地に入る、それほど進まないうちに路地は更に枝道に別れている。右手の枝道は凸凹で、あちこちに穴ぼこがあいている。幅は車一台が何とか通れそうな程度の狭さである。道の両側には色々な種類の雑草や小木が繁殖している。車体を叩くカーンカーンという音が響く。路地の突き当たりはがらんとした空き地で、そこが整備工場である。

あなたの車は直射日光を受けて広場に放置されている。それまで響いていた金属音が止む。あなたは音のしていた方を見る。修理工場の屋根の陰に作業中の子供たちがいて、まるで同じ一対の目だけを使っているかのようにあなたを凝視する。あなたは視線を自分の事故車の方に逸らし、近づいていく。それまでのように車体を叩く音がまた響き始める。

あなたは車のドアを開けて中に首を突っ込む。もしも何

か落ちていたら持つて帰ろうと思つてゐる。前部座席一帯にガラスの破片が散乱し、一部には血痕がこびりついている。途端にあなたの内部の野獣が目覚める。それは再び身震いし、まさにこの瞬間に大きくなつたような大きな咆哮があなたの全神経を揺るがす。

あなたはドアを閉めて、車から離れ、ヨロヨロした足取りで前方のガラス張りの事務所に向かう。折りよく、のっぽのマスターが外で出てきて、あなたを迎え入れる。

「病院の方は片付いたんですか？」と相手は笑みを浮かべて挨拶する。

「ええ、まあ」

「異常が見つかった人は？」

「いや誰も。慰謝料と治療費を払つただけです」

「大変でしたね……。え、おたくどこか具合悪くないですか？ 顔色が良くないですよ。さあ事務所に入つて下さい。涼めます。なにしろ外はこのひどい暑さですからね……」

あなたは彼について冷房の効いた事務所に足を踏み入れる。車体を叩くうるさい音が少しは小さくなる。あなたはインク缶、タイヤ、バックミラー、クランク、バンパーやナンバープレートなどが雑然と散らばつた狭い部屋の壁に立

てかけてある自動車用チェアに座る。背の低い整備士の顔は見えず、部屋の隅にある事務机に座っている若い女が一人いるだけである。

「もう一人の彼はどうしたの？」とあなたは訊く。

「ああ、さつき出かけたばかりです。保険会社から電話があつて、車を見てほしいと言うんで」。のっぽは女性の前にあるもう一つの事務機の椅子に腰を下ろしながら答える。

「ここは忙しそうですね」

「見ての通り、大抵は保険会社の仕事です」

「それは楽でいいですね。依頼が途切れることがない」

「それでもありませんよ。何とか食つていくので精一杯です。保険会社もなかなか要求がきついですからね。それでも仕事が途切れないように守つてくれるところはありますが。良いところもあれば、悪いところもありますよ……」と言つて、彼は愉快そうに笑う。

「あのー、ぼくの車の修理代を教えてくださいませんか。そうすれば、家に帰つて少し休めます」

「いいですよ。本当はこんなに早くいらつしやる必要はなかつたですよ。月曜にいらしても良かったです。」

「早く知りたかったものだから。そうすりゃ、そちらにお渡しするお金を用意できますからね」とあなたは笑顔で言い、彼は笑う。

「大丈夫ですよ。どっちにしろ車はここにあるんだし……」彼はあなたに微笑んで、それから女性事務員の方を向いて、「どうなっているかメモしてきてくれ」と告げる。命令されると同時に女性は机から立ち上がり、神と筆記用具を持って出て行く。

「大丈夫ですよ。心配はいりません。直せるところは直しておきます。修理が難しいところは交換です。変なことはしませんよ。警部の名前を傷つけますから……」

「警部とはどういういきさつで?」。あなたはあの若い警部が整備士を斡旋したときからある疑念を抱えたままだ。「もうそこそこ長いですよ。最初のころは、よく叱られました」

「どんなことぞ?」

「この整備工場は無許可で、違法なんですよ。警部は俺らが闇で稼いでいると睨んだんですが、社会の害になることをやっているわけじゃないと、見逃してくれたんです」

「性格いいな。あの人がいなかったらこつちも困っていたよ。」

あの人が修理費の交渉におたくたちを呼んでくれて助かった」

「当事者が整備士を連れてこない場合は、たいいてい警部が俺たちに声をかけます」

「今朝はずいぶん助かりました。でないともっとむしり取られていた」あなたの心中では、まだまだ感謝の気持ちが続いている。

「こうですよ。俺はああでもない、こうでもないと法外な要求をするケースを色々見てきました。おたくのケースが一つ幸運だったのは、だれも重傷者が出なかったことです。そんなことになっていた日には……」

……あなたが慰謝料と総合病院のことについて彼に話している間、女性従業員が戻ってくる。彼女は、壊れた部分メモした紙片を渡す。のつぽの整備士は紙片を受け取ると、上体を傾けて念入りにチェックする。

「計算機をくれ」

あなた自身はこの件ではまったく知識がなく、相手の掌中の計算機が計算した数値を示すのを待つのが唯一の仕事だ。しかし、何も興奮することはない。朝方以来、数字を耳にするにはもう慣れっこになっている。

今朝のあなたは用が済んだら実家に帰るつもりでいた。しかし、実際には今はここにいます。それどころか両親に持っていくはずだったお土産も大通りの闇の中、闇夜の事故の中で胡散霧消した。

突然、あなたは今日の未明に旅行に出る準備として昨夜の内にガソリンタンクを満タンにしていたことを思い出す。それはいまの状態のあなたの車にとってはすでに意味はない。このガレージの主にあげて使ってもらおうとあなたは考える。彼には少しは助けになるはずだ。

「あのさ」とあなたは相手に呼びかける。彼は計算機から顔を上げる。

「ぼくの車は満タンなんだ。おたく、使っても構わないよ。許可するから」。あなたはこの提案が相手への小さな心遣いだよとも言わんばかりに微笑む。

「それ本当？俺見たけど、なかったよ」

「あるとも。昨日、自分で入れたんだから。今朝になったら故郷に行く予定だね。」あなたはまだ自分の耳が聞いたことを信じられない。

「この目ではつきり点検したが、なかったよ。車をここに運んだ直後に」彼は自分の目を見たことを主張する。

「ええ、じゃあ、どこに消えたんだろう？ だって自分で満タンにしたことはつきり覚えているんだから。タンクに穴が空いて漏れたのかなあ」

「漏れてはいませんよ。それより、事故車を警察署の敷地に置いていたのはいつでした？……」

「昨夜だけ」

「一晩中警察署に？」と相手はさらに確認する。

「そうだよ。どうして？」

相手はそれで納得したという笑顔になる。「あーあ、それだつたら仕方がない。あの辺りの人間がガソリンを抜いたんですよ」

「車のキーはぼくが持っていたのに？」あなたはまだ事態が呑み込めない。

相手は、いかにもとんまな話だと言わんばかりに笑う。

「ガソリンだけじゃありませんよ。あそこに一晩中放置してある車があれば、タイヤホイールだろうとカセットラジオだろうと勝手に外して持っていけます」

「警察署に止めているのに？」あなたはまたにわかには信じられない。

「そうだよ。警察署の敷地だ」

「警官は何も知らないのかな？」

「知っているか知らないかまでは分からない。しかし衝突事故は日常茶飯だから、常に事故車が運び込まれる。それで一晩放置していたら、一巻の終わりさ……」

あなたはかつて聞いたことのある道路上で交通事故のことを比較例として思い出す。即死を免れた重傷者がいる場合、軽傷者がそばに来て、堂々とゴールドネックレスや時計を奪ったという話を。それはあなた自身が今回遭遇したことで大して違わない。違うのは、単にあなたの場合に身につけていたものではなく、身体から離れていたものが被害に遭ったというだけのことだ。

「全部なくなっても大したことじゃない」とあなたは落ち着き払った声で相手に告げる。

相手はうつむき直して計算を続ける……。

耳にしたことから、今日経験したことを含め、色んなことがまるで朝方の霞が太陽光線を受けて消え、それまでに覆っていた真実が明らかになるように、明瞭に見せてくれただけだ……。

「トータルで四万五千」マスターが顔を上げて告げる。

「え、いくらだつて？」

「四万五千です。タクシーの修理代を入れて」

「まけてくれないの？」

「いやー、これでもギリギリなんですよ。これ以上まけたら、私の取り分がなくなります。朝も言っておいたでしょう。クラシクの交換は必要ないって。あれは元々腐食していた。信じられないなら見に行ってもいい。あれを新しいのと交換すると、一セットで六千以上になる……」

「向こうも頑固だったからね。それでうるさくなつて交換を了承した」とあなたは弁解する。

「向こうは儲けたつてわけです。あなたが折れてくれて。あの連中は手に負えない。連中があなたの車にぶつかったら、口を拭つて一言も言わないので、向こうからは何も取れない。あなたの車が連中にぶつかったら、これを交換、あれも交換、これだけ払え、あれだけ払えというさいつたらありやしない。もしおたくが金を渡して相手の所で直してくれと言ったら、絶対に交換はしないさ。保証する。お金は取っておいて、自分で使つた方がいいに決まっている。こつちは何もかも承知だ。もし俺だったら、相手を裁判所に訴えたいところだ。奴さんは衝突してくれたのがおたくでラッキーだったと思うよ……」。

「放っておくさ。好きにしたら良い。向こうにぶつけたのはこつちなんだから」。あなたは自分の置かれた状況を認める。「……それより、少しまからなかなあ」

「本当に無理なんです。こうしませんか。もしもこれより少しでも多く費用がかかった場合でも、おたくは差額を払う必要はないということで」。マスターは歩いてきてあなたにメモを渡す。あなたは素早くメモの数字を読み取りながら答える。

「駄目なら駄目でしょうがない。まあ修理の方は任せたいよ」と言いつつ、あなたは金額の書かれたメモを返す。

「任せて下さい。心配いりません。いい加減な仕事をしたら、一生懸命取り次いでくれた警部の名を傷つけますからね。」

「で、終わるのはいつ？」

「おたくのは約二ヶ月です。先にタクシーを修理しなくちゃならないんで」

「じゃあ、マスターは自分の仕事をやって。ぼくの仕事は金を工面してマスターに渡すことだ」あなたは微笑み、相手は声を出して笑う。

あなたは朝から遭遇した出来事に疲れ切った心身を抱

えてアパートに戻る。あなたの中の自我がある形状を有してたとしても、すっかり光輝を失って、いま残っているのは元の形をほとんど留めていない姿だろう。あなたは野生動物を映した映画の、犬の集団に一齐に食いちぎられる動物のシーンを思い出す。

3

淡い緑色を帯びた時計の針が

順に数字の上を通過する。

暗闇の中で淡く光っている数字を。

それは立ち止まって人を待つこともない。

あなたはベッド上の目覚まし時計から視線を外す。蛍光を発している数字が、いまの時間が午前一時過ぎであることを告げている。しかし、あなたは眠気をまったく感じない。

脳裏では過ぎた二日間の出来事が渦巻いている。いくら目を閉じようとしても、結果は無駄で、考えは損害のことばかりに向いてしまう。ほかのことを考えようと努力する。それでもじきに元のところに戻ってしまう。胸の内でも数字を数えるが、一からどこまで数えたのかも覚えておらず、逆に一日中支払わねばならなかった金額の方に考え

が向いてしまう。

そうして一人で愚痴ることになる。

——何てことだ。

——何てことだ。

——寝るんだ。考えてどうなる。起きてしまったことだ。

身体障害者にならなかつただけでもめつけものだ。

またやり直そう。これまでだってゼロからの出発だったじゃないか。

——ゼロからの再出発。あなたはもう一度自分を慰める。

それが何回目になるのかなんてこれまでに数えたことはない。

これまでと違うのは、今回は新たな出来事が起きて、それが少しは心の慰めになっているということだ。

「そうだ。またゼロから始めよう」あなたは暗闇の中でそう呟き、自分が最初に一步を踏み出した頃のことを思いを馳せる。

……あなたは学業を終えたときのことをまだ良く覚えている。その頃のあなたの身体の内部には、学生時代に経験した活動と同様に、鑄型から取り出されたばかりの四

角い金属のような新鮮な理想がぎっしりと詰まり、外の世界に対する美しい信頼があり、すべての人間は社会のために動き、市民はみな平穩に生きていけるために働いているという理想的な社会像を抱いていた。

あなたは幸運なことに求職活動に奔走する必要はなかつた。あなたの先輩にあたる知人の友人がシーロム界隈にある彼の共同経営する広告代理店で働かないかと誘ってくれたからだ。もしかしたら、まだ学生時代だった頃からあなたの技倆を見込んでいたのかもしれない。あなたは全霊を傾けて広告代理店で働いた。責任を持たされた仕事でしくじることがないよう、すべてを仕事に捧げた。誰もが自分の仕事に全力で取り組みれば、社会を良くすることに繋がる、といつも本気で考えていた。

長い時間が経つと、仕事を通じて得られる経験もますます増え、会社での居場所を見つめるほど、ますます業界の収益システムの道筋がはつきりと見えるようになった。ちようど、モクモクと出てきた大量の煤煙が薄まり、徐々に器に煤として付着して、長い間にはあなたの目にも見えるほどの汚い黒色の層になるように。

あなたは、市民を騙して金を巻き上げるためだけに最

高のアイデアを絞り出す出す広告システムの本質というものが見えてきた。まだあどけない子供さえも例外ではなく、広告業界は自社が宣伝を引き受けた商品を可能な限り大量に顧客に売りたいというただ一つの目標を掲げている。市民には、自分では使ったこともなければ、使いたいとも思わない商品であるにもかかわらず、自社が宣伝を請け負っている商品があたかも天国から降りてきた魔法の商品であるかのように喜んで騙すことで。

あなたは繰り返し何度も自身の中でも外でも葛藤した。年に数百万バートの広告費を獲得するために、大きなクライアントを奪おうとあちこち駆けずり回った。それは、不運な餌食、を奪うために自分も傷つく野獣と少し変わることはなかった。その間にもあなたは、「不運な餌食」は本当の餌食ではなく、消費者は、「一時的な餌食」になっただけで、商品の購入者は広告会社の暫定的な餌食になっただけに過ぎないと考えることにした。

しかし、本当の餌食になった者、半永久的な餌食になった者は、広告を信じて商品を購入する普通の市民だった。それらの人々は、死んだ動物の死骸がぐるりと取り囲んだ猛獣から逃げるができないように、抗う手段を持つ

てはいない人々だった。巨大な広告費は商品生産の原価に含められ、その結果、商品の値段が高くなるのは当たり前だった。一体全体、ある商品の広告費を払う者が、もしそれらの人々が自分の役に立てるためだけの商品を買いたいにも関わらず、商品の価格に広告費や諸々の費用が含まれているとき、人は広告会社にも支払っているのだと言うことを知ることなしにお金を支払うのを避けられない。こうして商品の購入は、同意したという認識なしに先に広告費、諸費用込みの金額を払う。前払い、と少しも変わらなくなる。

あなたは自分の給料は、本当は消費者からもらっているであり、広告会社や商品の生産主からもらっているわけではないと考えると、恥ずかしさを感じざるを得なかった。それは単にいくつかの手を経てあなたの元にたどり着くというだけのことなのだ。しかし、あなたは市民の税金で成り立っている教育機関で学んだ専門知識のお陰で逆にクライアントと一緒にあって庶民を騙している。市民はあなたに学ぶ場所を与えたうえ、あなたが働き出すと、さらに給料まで与えている。しかし、あなたが市民に何をお返しできているかと考えると、冷や汗が出るほど恥ずか

しく感じた。

同時に、鑄型から取り出されたばかりだったあなたの四角い身体は、業界内での環境によって毎日、角が削られていった。学生の頃に考えていた理想は、徐々にやすりにかけられて変容し、最後にはあなたの中にかつてはあった鋭い切っ先は丸くなり、企業内の先輩たちと同じようにどこへでも転がっていく球体になった、と考えないわけにはいかなかった。

だが目を閉じて広告システムの餌食となった多くの人々のことを改めて考えた時、あなたはそれと戦う決意を固めた。そのシステムを変えるのは容易なことではないと知りつつも、何もしないよりはましだ、大木の芯をかじる小さな虫になろう。何の混乱も引き起こせないとしても、少なくとも巨人を悩ます一匹の虫ではいられるはずだ。

あなたはその日が来るのを辛抱強く待った。同時に、可能な限り多く業界での経験を積み重ねるように努力した。広告業界での仕事のフローチャートを学び、その間にも、あなたは業界を動かす多くの重鎮ともコネを築いた。ある人物は学生時代の友人だったこともあり、新たに知り合った知人もいた。

あなたが見つめていた問題は、数人の知人はあなたより先に見抜いていたが、どう解決すべきか分かっていなかった。彼らは、これはもう出来上がったシステムなんだ、我々のような後輩にそれをかたづけける力量はなく、後続世代が改革を始める時代が来るのを待つしかないと言った。やれることがあれば、先にやるべきだ。問題に手をこまねいて、自分たちには何もできなかったと弁解して、後続世代に解決を任せるのではなく、あなたは仲間にもそう主張した。もしも自分たちの世代が自信がなくてやらないのなら、新しい世代に一体何ができるだろうか。後続世代が台頭して我々と交替するのを待つというのは、我らの世代の責任逃れだ。少なくとも我らの世代から先に始めるべきだし、分かっている者が少人数で始めるべきだと。

あなたは、才能豊かで同じ考えを共有する人間、それ以上にも何でもはつきりと話し合える仲間を探し始めた。かねてからの理念を実行に移すために小さな広告代理店を共同で立ち上げるという計画があった。

あなたたちの夢見た会社のコンセプトは、本当に必要な額を超えるサービス代は取らないというものだった。もし広告費を値下げすれば、商品の生産原価も下げられ、消

費者も商品を安く買えるはずだと信じて。しかしあなたたちも心中では承知していた。あなたたちの夢の中の会社は「リーディングカンパニー」と呼ばれているような、大量の商品を扱う大企業からは大きな仕事を受注できないであろうことを。なぜなら、市場における信用から始めて種々の機材においても、あなたたちは大きな広告代理店に太刀打ちできないからだ。それであなただちは「ニッチ分野」と呼ばれる隙間商品を扱う会社に解決策を探した。その種の事業所は大抵零細企業で、資本金も限られており、市場で大きく成長する機会ほとんどなかった。占有市場の分け前は細分化され、開かれた市場は狭いものに過ぎなかったからである。同時にこれらの零細企業は、年間を通しての宣伝広報活動の立案といった点で、大きな広告代理店と競争可能な資金的余裕はなかった。あなたはそのことでそれらの顧客こそあなたたちの目標とする顧客だと見なした。

仲間内での意見交換から始めた。我々が広告費を下げたとしても商品の販売者が値段を下げようとしなければ、何も役に立たず、それどころか商品を供給する企業に日毎により多くの利益をもたらすだけで、最終的にはます

ます理想から乖離してしまうと主張する者もいた。あなたは、そんな風に考えるのなら、何もやる必要はない。その意見に対しあなたは、放つて置けばいい、だが、我々が試しにやってみる機会があり、仮にそれらの企業が本場に成長するとすれば、それは彼らが大企業に挑戦し、市場を奪う良い結果をもたらし、ひいては商品価格の低下に繋がるかも知れない、という意見を述べた。

あなたはいまでも常に、世間の人間が互に行っていることは、誰がそれをやっているにせよ、常に影響を与え合っていてその後には続き、最後には循環して実行した人に帰ってくと信じている。もしその人物がさらに有利な立場に立つても、劣勢な立場に置かれた側に有利となる機会が巡ってくれば、やがて有利になる。そのプロセスがずっと繰り返される。そして運動が一巡すると、その人物が生きている社会は有利な立場を目指す者ばかりになる。そういった社会の人間は、弱肉強食の社会に墜ちていくのを回避できない。新たに登場するその人物の子や孫もまた同様にこうした弱肉強食の社会に墜ちることになる。

しかし、人が他者を搾取しないことで始めると、その結果は逆の結論に落ち着く。それは始点もなければ終点も

なく、四六時中ずっと回り続ける「円環運動」のように影響を与えていく。

あなたが仲間たちに語ったのは、もし全員が多くの利益を得ることだけを目標にしたら、誰が「損する側」になるだろうか。損した人間は他の人間より有利になる機会がなく、他人と交渉するチャンスを失った人、ことである。

それらの人々は、常に損をする「餌食」、大部分がそうなのだが、になるしかない。これらの人々には自分自身が生産した果実の価格交渉をしたり、自分で決定したりするチャンスはない。その点は自らの生産物の価格を決めることができる他の業界の企業とは違うところだ。考えてみてください、国の大部分の人間が生活に困ったら、わが国はどうして平穏でいられるかを。もしも食べる物がなくなったら、人は強盗か泥棒になって大きな社会問題になる。生活困窮は、かつては人より有利だったこともある人間の所まで降りてきて、自分の資産を注意深く守ることが避けてたいことになる。

そうである以上、我々がなさねばならない方法とは、みんなで共助してやることだ。たとえたかだか社会の片隅のような行いであっても。何もしないよりはましだ。

確かに、それは耳目で分かる結果をもたらさないかも知れない。だがいつの日か、みなが助け合ってたたくさん実行できれば、その結果は「円環運動」の法則でその分だけ早く我々全員への果報として巡ってくるのだ。決してある特定の人物にだけではなく。

最後には仲間たち全員がその考えに同意した。だが、共同でやる仕事は本人を経済的に困らせるものであつてはならず、自身と従業員が食っていけるだけの利益があるものでなくてはならず、その仕事のために食べ物にも事欠くということになってはいけないという付帯条件がつけられた。

あなたは仲間の提案したその付帯条件に同意した。

元の会社に勤めていた四年間、あなたは経験を積み、かなりのお金を貯めていた。そして準備が整ったと見るや、仲間の友人二人と共に会社を辞めることを決意した。一人は美術部門の人間で、会社のアートディレクターに可愛がられていた弟子だった。二人目はカメラ助手だった。時期を同じくして、別の企業で働いていたあなたの友人三人も辞めて合流した。彼らはそれぞれコピーライターとしてそこそこの経験を積んでいた。

あなたたちは各自資金を持ち寄ると、三階建ての長屋ハウスを借りた。オフィスとしての内装を整え、電話も引いた。三階はカメラマンと美術部門でアートディレクターとして働くその友人の居住域とし、二階は写真スタジオにしてカメラやあなたの友人の持ち物だった機材類を置き、不足する物を少し買足した。こうしてそのスタジオは小さな仕事を引き受けることができる規模になった。もし手に余りそうなかいい仕事があれば、外でカメラマンを雇ってきて撮ってもらえばいいとあなたたちは考えていた。なぜなら、考えてみると、多額の資金をこのスタジオにつき込むのは無駄で、割に合わないからだだった。一階はオフィスに改装した。ドアに近い方がクライアント受け付けで、奥の部屋を作業室とした。その間、あなたは友人たち全員が株を持ち合う会社の登記を行った。

仕事は事務所を立ち上げるのとほぼ同時に舞い込みはじめた。かつてあなたが勤めていた会社とあなたの友人が勤めていた広告代理店から小口の顧客を引き抜いていたお陰だった。もちろん、高品質を維持したまま価格は安くという仕事は当然ながらクライアントには好評だった。顧客がこのコンセプトを口コミで広めてくれれば、事業の先の

見通しは明るいあなたたちは考えた。同時に、あなたは糊口をしのぐために仕事を取りに行く必要があると思っていた。広告代理店の開設を知った友人たちもそれぞれに仕事を探すのを手伝った。しかしそれでも、まるまる一ヶ月の仕事には満たなかった。

二ヶ月が経過したときに出した結論は、食っていけるだけの仕事がない。家賃、電話代、水道光熱費にも足りず、全員の給与はいうまでもなく、毎日の食費を確保するがやつとだということだった。あなたたちには将来の暗い風景がおぼろげに見え始めた。そこで、皆で相談し合い、広告宣伝に限らずもっと幅広く仕事を取ってこなくてはという結論になった。オフィスでやっている仕事に少しでも関係があればどんな仕事だろうと構わない。ただし、それでも当初のコンセプトだけは変えなかった。

今回見いだした解決策は、新たに本のイラストや装丁を引き受けるということだった。その本はある協会の月間報告書だった。印刷所に入れるまでの全行程、クライアントが満足のいくまでの色の校正まで引き受けた。あなたの親友は女性雑誌の表紙を飾るファッション写真の仕事であるブティックから委託された。ブティックのオーナーは最初

の号を飾った写真の出来に目を奪われ、会社のコンセプトに共鳴した後、喜んで契約を交わした。

三ヶ月目には何とか食えるようになり、すべてが良い方向に回転し始めて、未来が見渡せるようになった。初期からのクライアントは逃げることなく注文をくれた。彼らの紹介でやってきた新しいクライアントの数も増えた。それらのほかに、臨時の仕事が絶えず入った。

九ヶ月目になると、仕事はあなたたちの手に余るほどまで増え、スタッフを拡充する必要に迫られた。アートディレクターの地位にいたあなたの親友は、いまのように社の能力を超える量の仕事がずっと舞い込むかどうかは確信がないが、スタッフの増員は検討しておくべき課題だ、と提案した。彼の案は、午前の授業が終わった大学生が暇な午後を目をつけてアルバイト生として日給制で雇う、仕事がないときは雇用をすぐ打ち切る、そうすれば互いに悪影響もないし、教室では得られない真に実践的な能力を身につけさせられる、というものだった。あなたたちは彼の提案に賛成した。ただし、雇い入れる学生アルバイトは、いい腕は持っているが金がない、少なくとも手にしたバイト代を遊びではなく実家の家計の足しにできる人間で

なくてはならない、という付帯条件をつけて。そうならば、勉強の後輩たちを支援するのにも効果的はずだった。

あなたの友人の美大教授は五人の学生を選抜して紹介した。あなたたちはその中から三人を選んだ。その三人のうち二人が卒業すると、会社の常勤スタッフとして雇った。

……五年が過ぎた。あなたたちはまだ疲れも知らずに精力的に働いていた。仕事は途切れることなく入ってきた。そして学生アルバイトを受入れて訓練することも続き、それは会社のポリシーにまでなっていた。学生はたえず卒業し、あなたたちは業務上の必要に応じてそのうちの数名を雇った。

今年が明けると共に、一つの問題が発生した。あなたたちの会社の発展は天井に差しかかっていた。その天井を突き抜けて拡大しなければ、事業はそこで停滞し、大手広告代理店になる道は閉ざされてしまう。あなたの仲間たちはそれぞれにその壁を突破すべきだ、という考えを持っていた。しかし、拡大の条件は「仕事で人を育て、我々のコンセプトをもっと広める」ものでなくてはならなかった。

コピーライターでもあるあなたの友人は、自分たちが富裕になるために拡大するのではない、たとえそれが結果的に付随することはあっても、そのことが今回の事業拡大の主目的ではない、ということを確認した。彼は全員に、事業拡大の孕む危険性に留意することを求めた。

あなたたちはみな拡大路線に賛成し、今後のターゲットとするクライアントを「規制市場に挑戦する」顧客に決めた。もちろん、その手の顧客開拓は、ほかの広告代理店との競争を強めるものだった。しかし、あなたたちが占有している領域はこれからも力の源泉としてしっかり保持していくべきものだった。

あなたと仲間たちは今回の事業拡大にはある装備が重要になることを知っていた。それは車だった。無論、車は業務にとって根本的に必要な備品とは言えなかった。なぜなら、ある種の用事ではタクシーの中で落ち着ける時間を見つけることができたし、それほど急ぎの仕事でなければ、路線バスを利用して目的地に着くこともできたからである。

しかし、自家用車は形式的にも必要なものになった。乗っている車のメーカーによってモノの価格を決めたがる人間の

価値観を計測するマトリックスとして。それはここ数年の間に生まれた思考方式だったが、何人かについては毛穴の中まで同じレベルで急速に浸透した考え方となった。それらの人にとってさえ、以前は車は単なる移動手段の一つに過ぎなかったのに。

あなたにはそのことがよく分かっていった。それでもその考えをむげに退けることはできなかった。いろいろな用途に使える以上に、値段の張るセダンはあなたと仲間の社会的信用をいっそう増進させる助けになった。

そこであなたはまだ比較的新しい中古車をあなた自身の宣伝道具として使うためにローンで買うことに同意した。あなたは同時にファッションも変え、より社会的信用が増すように趣味を変えた。それは自分の気持ちに逆うものであったにもかかわらず、クライアントにコンタクトする場面で必要とされるものだった。あなたはその前に何度も自分でもおかしいと思わないわけにはいかなかった。以前には「宣伝広告マンはすべてを宣伝できなくてはならない、自分自身すら」という言いぐさを嫌っていたにもかかわらず、あなた自身が結局はその地点に到達したわけだった。

……幸運の風があなたの側に吹いて来た。ある建設会

社が競走入札に参加したあなたたちの会社のプランを選んだのだ。その建設会社は分譲団地のプロジェクトを遂行中で、あなたの会社はプロジェクトの最初から終わりまでかなり長期にわたる広告宣伝の担当だった。契約が無事に終わった後、あなたたちは資本金の増資案件を含めたオフィスの内部改革にとりかかった。というのも本当のことを言うと、あなたたちは実際に資本を出したのではなく、各人が元の仕事で貯めたお金を持ち寄って日々の資金としていたに過ぎなかったからだ。あなたはオフィス空間を拡張するために中二階を設けることを提案した。新たにロフト階を作ったことで賃料は増えたが、今後の企業活動に必要な固定資産増強にもなった。それまで線引きされていなかった仕事は整理されてきちんと部署ごとに割り振られた。その結果、各部署の販売実績は増え、その間にも中規模レベルの仕事の受注も増えた。新しいシステムに基づく業務は次第に形を整え始め、心配なことは何もなくなくなった。そして、この年がアートディレクターのポジションにあるあなたの親友が結婚を決めた年になった。相手は学生の時にイン턴ンとしてアート部門で働いたことがあり、卒業後もそのまま勤めていた女性だった。

同居していたカメラマンの友人は三階から外へ引っ越していった。仲間夫婦に三階を新婚住宅として使ってもらっためだった。

親友の恋人は会社の中でも重要な存在になりつつあった。なぜならば今回、彼女がそれまでのようなパートタイムの従業員ではなく、共同経営者の妻の立場に昇格したからだ。あなたたちはそれまでの経営陣にもう一人の株主を加えることになった。彼女は会社が自分のものになったかのように企業活動全般に目を光らせるようになった。

この時期は、あなたたちの会社が新しい業務システムで新しい基礎を固め始め、すべてが良い方向に流れていて、ただあとは時間が名声と経験をそれ以上に伸ばしてしてくれるはずと思える時期だといえた。少なくとも直近数年後にはもつと安定的に事業拡大しているはずだった。

しかし、あなたたちが前もって予想していなかった事態があなたたち自身の間から生じた。昨日、あなたは親友とその連れ合いから子供ができたという喜ばしいニュースを聞いた。あなたは若夫婦には当たり前のこととしてそれほど気には留めなかったが、親友が二世誕生の喜びを自分たちにはつきりと訴えてかけているようには感じた。あな

私たちはその日の夜、みなで祝宴を設けた。

面白おかしくふざけ合っているとき、あなたの親友の妻がその雰囲気重苦しいものに変える言葉を放った。彼ら二人がずっと考えていたことをあなたたちにストレートに告げたからである。親友はこんな折にはまだ話したくなかったようだが、どうしても話して欲しいというあなたの要望もあって、内心を打ち明けたのだった。

彼が打ち明けたこととは、彼は精神的に疲弊しきっており、あなたと仲間の円環運動理論とその最終帰結への信頼がなくなりかけているということだった。彼の指摘によれば、現在の世界は日毎にますます互いに奪い合い、相手より優位に立とうとする動きが強まるばかりで、誰であろうと互いに隙あらばかすめ取ろうとしている、自分たちが広告費を安くしようとするとき、外の業者はその理由なんかを見向きもせず、商品の価格も下げはしない。それどころか自分たちのコンセプトの傘の下で、出入りの業者たちはますます多くの利益を手にする結果になっている。あるいは子供を騙す贄沢品の宣伝を引き受けない方針を貫くのは良いが、その一方で同業他社は喜んでそれを引き受けている。状況がそうであるとき、小さな

精神的報酬との交換のために我慢していまの繁忙な仕事を続けることにどんな正義があるというのか。たとえこれまでの仕事で業界で何とか生き延びるために有効な方法だったとはいえ、今後さらにみな時間を注ぎ込むのは、ほとんど無駄なことだ、ということだった。彼はかつて他の会社と一緒に働いていたことのある一人の友人のことに触れた。その人物はこれまでに三つの会社を渡り歩き、自分たちと同じ労働時間を使っているにもかかわらず、いまでは責任あるポジションに出世し、報酬もはるかに多く受け取っている。しかもこの会社のようにそれぞれが全体をカバーする責任はない。あなたの親友は、何年もやって来たものの、結果は目に見えるほどポジティブなものではなく、逆に悪化しつつある現状をそのように総括した。彼は昨日の新聞記事の内容をあなたに聞かせた。ある会社の事務員が会社の金を横領したが、バイクタクシーが故障してラーチャダムヌーン通りで転倒したため足を骨折して立ち上がれなくなり、盗んだ金が道路上に散乱、それを見た群衆が我がちに群がって奪い、着服したと言ったものだった。彼はその話を大衆への失望の溜息と共に語った。

彼は従来の考えを捨てて、同業他社との斬り合いに路

線転換すべきだと提案した。そうすれば数年後にはまともった内部蓄積ができるのは間違いないと彼は信じていた。これまでに費やした時間は良い教訓だったと考えよう、と。

あなたたちは離れかかった彼の気持ちを元へ引き戻そうと、以下の理由を掲げて説得した。いまの報酬はたしかに彼が欲しているようには多くないかも知れないが、食うに困るほど低くはないし、内部保留の資金もそこそこある。決して巨額ではないが、負債やローンを抱えている多数の会社や個人よりましだ。それに大事なことはこの仕事のやり方で得られる心の平穏だと。

あなたの友人はなおも自分の考えに固執した。話し合いの雰囲気は、もし君らが考えを変えないなら自分の持ち株を全部君らに売るか、ここをやめて別の会社に移るか、のどっちかを選ばせると彼が言うまでに険悪なものになった。あなたたちには、なぜ彼がこれほど早く考えを変えたのか、なぜ子供ができたという話をみなに告げたのかを理解できなかった。

彼には子供ができる。生まれてくる子供の未来を保証するための安定的な生活基盤を作る必要がある。人は全体のことよりも先にまずは個人だけのことを考えるもの

だ。個人の心配事がなくなったとき、人は初めて全体のことを考えられる。彼はいま個人のことを考えるのに精一杯で、あらかじめ問題解決に備える必要が生まれた。自分たちがせて同業他社と同じくらいに受注価格の値上げを認めてくれれば、彼はもうそれ以上のことを望まないだろう、とあなたは親友の気持ちを推測した。親友は生まれてくる子供への責任感で転向したのだ。

そこであなたと親友は二人して仲間に解決案を示した。現在の自分たちの立ち位置は明日食べられるかどうかさえ分からないでいる絶対多数の人々よりはるかにましであり、世の中には義務教育すら終わっていない子供が数え切れないほどいる。それらの子どもたちに生活基盤を作つてあげることは、すべての両親の望みだろう。しかし、それと同時に、我々は子どもたちにより良い社会を築くことはしなくては良いのか？それとも、我らは悪い社会のただ中で少しでも良いポジションを得るよう子供を育てるべきなのか？子育ては我々次の世代全体を育てることに繋がっている。自分の子供一人だけを育てるのは違う。

あなたは親友に、決心する前によく考えてくれ、なぜならそれよりもっと良い解決策が必ずあるはずだから

ら、と助言した。だが親友が最後まで自分の考えに固執すると、あなたはもう彼に反論できなかった。と同時にあなたは親友に怒りを感じたのもまったくなかった。彼はずっと全身全霊で仕事に打ち込んできた。恐らく疲労が極限に足しているのだろう。それは一緒にやって来た他の仲間たちと同じことだった。少なくとも、あなたの親友が休みたいと訴えているのなら、休ませてやるべきなのだ。彼は他人のためにまだ何もしたことがない人よりは、ずっとましな人間だった。そして、もしもその日に彼があなたとは別の道を行くと決意したとしても、彼があなたの親友であることに変わりはない。

あなたは疲労と頭痛を感じた。横になって休みたかった。それで先に暇乞いして帰ることにした。親友の奥さんは、薬を飲んで一晩事務所まで休むように、と言ってくれた。しかし、あなたが明日の早朝に田舎の実家に帰る予定があるからと言うと、彼らはあなたを無理に引き留めることはしなかった。

親友はあなたが車に乗り込むまでを見守ってくれた。分かれるとき、あなたは彼にもう一度考え直してくれと頼んだ。

ドーンという轟音。大きな衝突音と衝撃音があなたの感覚器官の中で轟き、興奮が、あなたをいつそう苛つかせる。身体をねじって目覚まし時計を見る。午前三時十分だ。失った金が勿体ないという考えが消える。

またゼロから始めるだけのことさ。学業を終えたときは裸一貫だったじゃないか。あなたはもう一人の自分に語る。しかしそいつはあなたの言葉を軽々に信じようとはしない。

——お母さんに借りた車のローン代もまだ返していないのに。

それからぺちゃんこになった自分の事故車の哀れな姿とこの間の出来事がまた脳裏に順に蘇る。あなたは親友を思う。あなたに何が起きたかを彼が知ったら。自分を取り囲む親友や仲間の輪をどうくぐり抜けられるだろうか。親友が自分の道を選ぶ決断にどんな影響を与えるだろうか。あなたは確信が持てない。

夜が明けて日曜日になる。

あなたは依然として部屋の中に身を潜ませている。夜になれば、あなたは恥を忍んで闇に紛れ、あの総合病院へ傷

の手当てに行き、全員の処置代を支払わなければならない。彼らの姿は見えず、ただ証拠のサインが残されているだけである。

サインを見たあなたは、農民相手のミシン販売の商いが好調と言っていたあの老人と息子たちはまだ田舎へ帰っていないのかと訝る。あの老人がわずかな額の処置代を惜しんで本業の儲けを捨てるはずがない。それとも老人はすでに帰ってしまったのに、病院側があなたに支払いをさせるために、まだ彼らがいることにしておこうと他人に代理署名させたのかもしれない。

あなたにはどちらなのか確信が持てない。

4

月曜日の朝。

多くの人間が責任ある仕事にまみえるために持ち場に就かなくてはならない朝。月曜日の朝が厭でたまらない人もいる。ある人は自分の週末の休日を一時避難の壕に喩える。その避難壕では仕事上のやりとりの喧噪がなく、自由で、自分の意志に従って何でもやれる幸せがある。しかし、月曜が大手を振ってやってくるや、それは人々を避

難壕から追い立て、もううんざりしている道を歩くように急かたてられる。口とお腹は彼が易々と逃亡するのを許しはしない。

いまも、あなたは避難壕から出る準備ができていない。仕事に向き合う用意は出来ているのに、他人と顔を合わすだけの心の準備ができていない。必要性があなたを強制的に寝床から起き上がらせる。

あなたは身支度して、早い時間にアパートを出る。少なくとも、それで身近な人々の視線を避けることが可能だ。幸運なことに、あなたの額の大きなガーゼに注意を向ける人はいない。人々はそれぞれ急いでいて、他人のことなどに構ってられないのだ。

あなたは常勤スタッフとしては一番最初に職場に着く。アルバイト主婦がラジオから流れるニュースを大きな音量で聞きつつオフィスを清掃中である。あなたがやってくる足音を聞きつけた主婦は、振り向いたとき、あなたの予想通りの反応を見せる。

「額、どうしたんです？」

「怪我だよ。傷口を押さえているだけさ」とあなたは笑顔で言い、額のガーゼに触れる。

「まあ、ご冗談ばかり。本当は何にぶつかったんです？」

彼女の顔つきと声は大人が子供に本当のことを言わせようと圧迫するのと変わりが無い。

「車の衝突事故だよ」

「嘘でしょう、信じられない」

「本当だよ、小母さん。グシャッって潰れてさ。ほかにも四人の怪我人が出た」

「冗談でごまかすのは止めて。本当は何にぶつかったんです？」

彼女は依然としてあなたの言うことを信じない。

「本当に車をぶつけたんだ、小母さん」。あなたは真面目な口調でそう言い張る。「あのさ、コーヒーを一杯お願いできるかな」

「ちようどお湯が沸いたところです。ちよつとだけお待ちください。事故はどこで？」

「暇ができたらたつぷり話してあげるから。上の階の彼、もう起きてるかな？」

「起きてらっしゃいます。ここに着いたときに、男性が水浴びしている音が聞こえました」

「じゃあ、上に上がって彼とちよつと話してくる」と言って、

そこを離れる。

「コーヒーは？ 上に持っていくますか？」後ろから彼女の声を追ってくる。

「大丈夫です。すぐに降りてきますから」と振り向いて言うとき、あなたは階段に足をかける。

……三階に上がる間、胸の内で親友の質問への答えを準備する。あなたの親友は寝室の前の居間で新聞を読んでいる。あなたの足音を聞きつけた彼は新聞を置く。

「どう、週末は楽しかった？」あなたは機先を制して尋ねる。

「おいおい、顔は何にぶつけたんだ？」彼はあなたの質問には関心を示さずに訊き返す。

「車をぶつけてさ」あなたは普段の声で答える。その質問を受けるのが避けがたいことをあなたは予想していた。

「エー」。彼は驚いたという声をあげる。

ちようど寝室から出てきた親友の妻があなたを見るなり、「額を何にぶつけたんです？」と訊く。あなたは二人に最初から最後まで、修理代や慰謝料のことも省かずに詳しく話して聞かせる。静かに聞いていた友人は不快な顔になる。

「どうして俺に電話連絡しなかった？」

「面倒をかけたくなかった。お前たちはもう出かけてると思つたんだ」あなたは事故直後に考えた通りのことを言う。

「面倒なものか。こういう問題は助け合わなくちゃ。一人で交渉に行ったりするから、多勢に無勢になるんだ」。親友の声は少し怒気を含んでいる。

「いや、そうじゃなくてさ。間違つたのはこっちの方だから。」あなたは彼を宥める。彼は内部で煮えたぎる感情を鎮めようとしているかのように沈黙する。それで少しは苛立ちが収まつたようで、ゆっくりと口を開く。

「身体がともかく無事だったのは良かった。金はまた稼げばいい」

あなたは不機嫌な気持ちを抑えてくれた親友に微笑む。「支払つたお金は会社の必要経費として落としてはどうかしら？」と友人の妻が提案する。

「それがいい」親友は即座に同意する。

「いや、それじゃ悪い」とあなたは答える。「これはあくまでも自分の過失だ。自分で払う分を会社持ちにはできない」

「同じことだ。できるつたらできる。払うものは払わなくちゃいけないんだ」あなたの親友はそう強く主張する。

「同じことじゃない。それとこれは別だ。これは自分一人のことで、会社には関係ない。仮に俺たちが正しくない支出を認めたせいで会社の資金がショートする事態にでもなつたら、みんなに迷惑をかけることになる」あなたはこの問題の着地点を考える。「なんていうかな。どっちにしても本当に足りなくなれば、助けてもらうしかないが……」とあなたはどつちつかずの結論にまとめ、椅子から立ち上がる。

「どうするかはまずその二人に訊いてからだ」親友はまだ努力を諦めようとはしない。「ところで、お前の円環理論はどうなつた？ 結果は出たか？」彼はからかい気味に笑顔で尋ねる。あなたは答えの代わりに大声で笑う。あなたは下の階に降りてくる。ちょうど掃除婦がコーヒーカップを持って上がろうとしていたところだった。

「コーヒー、冷めちゃいました。だからすぐ上にもって行くと言つたのに」と彼女は小言を言う。

「これでも急いで降りてきたんだ。勘弁してよ」。あなたはこの掃除婦とはよく冗談を言い合う仲だ。肉親の叔母

さんのように温かく優しいところがある。

コーヒーを受け取り、自分の執務室に入る。座って、今日の十時にクライアントに答える約束の最終版レイアウト案をチェックする。これは新発売の飲料の広告だ。

オフィスの全員があなたの額傷について知ることになったのは、その日の遅い時間だけだった。半日勤務のお昼までの時間帯だったが、誰ももはや理由は訊かず、各人ともに自分の責任範囲の仕事に向き合っていた。そのため、事故のことは間接的に、ありふれた普通の話題になった。あなたはそのことでずいぶん気持ちが軽くなった。

クライアントとの約束の時間が近づくと、あなたは若いスタッフのバイクでクライアントのオフィスに送ってもらった。そのちよつと前まで、あなたはタクシーで行こうと考えていた。しかし、タクシー代が惜しいと考えたのだった。この二日間、あなたは様々な出費を強いられていた。そのことであなたはお金の有り難さというものを骨身に滲みて知ることになった。当然ながら、これからはあなたにとって一バーツ一バーツの価値が増すことになるのだった。一バーツというお金の持つ価値そのものには少しも変化がないにもかかわらず。

あなたは約束より少し早い時間に顧客の会社に着いた。それは予想取りだった。相手はあなたの額のガーゼについて尋ね、お悔やみの言葉を述べ、それから仕事の打合せが始まった。相手の要望に沿って小さな修正が加えられた。すべてが順調に進んだ。相手はあなたがプロポーズした五つのプランのうちの三つを選んだ。

あなたは手を入れるために持ち帰ったレイアウトサンプルを抱えてオフィスに戻ってきた。自分の執務室に物を抱えて入るとき、あなたの親友の妻が焦った様子であることを報告に来た。

「さつき、お電話がありました。本当に頭にくる電話で」

「誰から？」

「分かりません。訊いても答えないんです」

「なにか言付けは？」

「また電話するそうです。三、四回もかけてきたんですよ。外出中だと言つても、ぜんぜん信じてくれなくて。私に探しに行つてきてくれつて言うんです。私、本当に頭にきて。そしたらまた電話する、もしその時も不在なら、ここに来るからつて」

「まあ、落ち着いて。今度かかってきたらぼくが出るから」

あなたは自分の部屋に入る。電話の主が誰かはほぼ見当がついている。

「スムーズにいったか？」あなたの親友がサンプルを受け取りながら訊く。

「ああ、三つ採用だ」あなたは封筒からサンプルを取り出す。「これとこれとこれ。それから滴が落ちていいるこの部分は、ロゴが隠れないようにする。こっち側に落ちるよう変えて、*“ピュア”*の前に*“清潔”*という語を入れる……」

「三つともか？」

「ああ。ピュアだけじゃインパクトがないし、清潔じゃないかとも思われる可能性があるから、ピュアな清潔さが欲しいというのが向こうの考えだ」。あなたはクライアアントの考えもつともだというように友人に笑顔を送る。

「二番に電話です」と親友の妻が来て告げる。「例の人……」と彼女は声を潜める。

「これでいいよ」とあなたは友人に告げて、仕事机に向かい、受話器を取る。

「もしもし……え、はいそうです。私です」

「こっちはタクシー運転手だ。ちょっとガレージまで出て来

れませんか」。相手の声の調子は依頼半分、命令半分である。

「何かあったんですか？」
「ガレージで話した方が早い」

「まだ会社を出れません。仕事なんです。仕事が終わってからじゃいけませんか？」とあなたはお願いする。

「だったら構わない。だがハンドルを取り替えてもらえないのなら、来るには及ばない」相手は話を簡単にまとめて告げる。

「え、どうしてかな？ 整備工場のマスターとちゃんと話した？」あなたは新たな提案に戸惑う。

「もう話した。向こうは変えないって言うんだ。何とかお願いしますよ。でないとお上に訴えることになる」

「まあ落ち着いて。ゆっくり話し合いましよう」

「落ち着けたって。俺のが壊れたんだ、それを落ち着くなんてできるか。おたくのはどうなんだ。やっぱり来てもらった方がいい。納得いくまで話し合おう。こっちはおたくが戻るまで待つて、ずいぶん時間を無駄にしてるんだ。電話しても居留守を使うし。稼ぐ時間を無駄にしたよ」

「本当に外出中で、ついさつき戻ったばかりなんです。話は夕方つてこととお願ひできませんか。仕事が終わったら

急いで駆けつけます。いまは本当に抜けられないんです。仕事の打合せ中で」

「こっちにだつて仕事はある。そっちだけと思つたら大間違いだ」

「だつたら、先にそっちの仕事を済ませてください。夕方會つて話し合うということはどうですか？」

「夕方はこっちは車の運転中だ」

「ガレージのマスターと變つてもらえませんか」あなたはかなり気分を害していて、タクシー運転手とはそれ以上話をしたくない。

「もしもし」

「マスターですか？」

「ええ」

「どうです。ガレージで何か變つたことは？」あなたは確認のために尋ねる。

「タクシーの運ちゃんがハンドルを変えてくれと言ってきた。見たところ、ほんのちよつと變形しているだけで、叩けば直せる。そう言つたんだが相手は譲らない。叩いても元のようにはならないと言うんだ。わしは治ると言つた。あのハンドルは元々ボロだつたと言つて。だが向こうは譲らな

いんだ。それでおたくに電話して話をつけるように言つた。おたくが了解するなら新品と交換しよう。だが、そうなるも修理代が少し増えることになる」あなたにも先方があなたに決断を促していることくらいは分かる。

「で、おたくはどう思いますか？」あなたはマスターの意見を求める。

「わしの考えでは交換の必要はない。ちよつと叩けば使えるようになる。それでも使えなければわしが責任を負う。警察で署名した契約にもないことだ。変える必要はない。こつちを信じなさい」

「だつたらマスター次第でいいです」とあなたは言う。「彼に代わつて頂けますか？」

「交換しないんなら。こつちは納得できんよ！」タクシー運転手の大きな声が響く。

「そんなこと言われても。オーナーが請け負うそうです。それに契約の中身にはハンドル交換については言つてないし。そちらが納得できないと言われても、ぼくには……」あなたの声も興奮で粗くなる。

「こつちには何時に来れそうか？」
「仕事が終わつたら」

「だから何時？」

「六時」

「じゃあそれで。必ず来てよ」言い方が脅迫じみている。

「ああ。確かじゃなければ約束はしない。それじゃあ、これで」あなたは受話器を置き、うんざりといった様子で椅子の背もたれに身体をあずける……。

あなたと仲間は六時ちょうどにガレージに着く。ガレージの従業員はみな仕事を終え、敷地でタクロウ蹴り遊びに興じている。一人の男が使い古したバスタオルを身体に巻き、石鹼を入れたカランを持ってあなたの前を通る。あなたと親友は事務所へ向かって歩く。事務所の電灯は消されて真っ暗である。あなたはガラスドアに顔を近づけ、中に人がいないかを探る。中に誰がいるかもしれないと考えたのだ。ガレージのマスターが息を潜めてあなたを待っているかも知れない。仕事で疲れている可能性もある。しかし、あなたの目は誰の姿も認めない。

「マスターはいないの？」。振り向いたあなたは、あなたたちを見てぶらついていた従業員に訊く。

「いないよ。外出した」

「何時に戻るか、分かる？」

「知らない」

「ちゃんと時間を約束したのか？」写真家である仲間がそう言つて、腕時計を見る。

「このマスターと時間を約束した訳じゃない。だが俺が運転手と六時に会うと約束したことは彼も知っているはずだ。たぶん、近所に用があつて出かけたんだらう。俺、ちょっとタクロウをしている連中に訊いてくる、マスターが何か言付けていなかったかつて」

親友はあなたの方へ歩いて行く。あなたは分かれてタクロウ集団の方に向かう。あなたは彼らに尋ねる。しかし、オーナーがどこへ行ったのかを知る者はいない。彼らの様子は他人のことなど関心が無い様子だ。それがあなたであらうと、自分たちの雇用主であらうと。当面の関心は空中を上下しているタクロウの球だけのような。声をあげて球に夢中になっている様子は、勤務時間が終わった以上、もう二度と疲れるだけの仕事のことなど知りたくないと言わんばかりだ。

あなたは静かにガレージの幕を引く。後方から車のエンジン音が聞こえて、振り返る。狭い路地を空色のタクシー

がガタガタ車体を揺らしながら走ってくる。近くまで来たとき、運転席に腰掛けた人間が見知ったタクシー運転手であることが分かる。彼は道路の脇に車を止め、すぐに腕に入れ墨男と一緒に降りる。二人は真っ直ぐにあなたに近づく。

「やあどうです」とタクシー運転手が挨拶する。

「約束通り来たよ。どんな感じ?」

「ハンドルは完全に曲がっちゃまって、使い物にならない。どっちにしろ交換しなくちゃ。嘘だと思ふなら、一緒に見てくれ……」そう言って先に歩き出した彼にあなたは言う。

「マスターの話では叩けば治るっていうんじゃない?」

「叩けば治るってね、俺のはぶつけられるまではちゃんとしてたんだ。旦那の車のハンドルはどうなんだ。叩いて治るかい?」彼は振り向きざま、不機嫌そうに吐き捨てる。そこであなたは黙り込み、ただ後ろをついていき、タクシーまで着く。

あなたの三人の仲間も揃ってやって来る。

「おい、若いの、懐中電灯あるか。持ってきてここを照らしてくれ」。タクシー運転手が側を通った若い従業員に頼む。

「何?」

「懐中電灯ないか? そいつでハンドルを照らしてくれ」

「あるけど、事務所の中だ。取って来れない。オーナーがいないから、鍵がかかっているし」

「お前たち、鍵は持っていないのか?」

「ない。オーナーが持っていた」

「待った方がよい。彼が戻ってから一緒に見よう」とあなたはタクシー運転手に言う。

「もつとかかりそうか、戻ってくるまでに?」とタクシー運転手が従業員に訊く。

「知らない。何も知らないよ」。その若者は去って行く。まるで自分には何の関係もないといわんばかりに。

「あっちの灯りの下で話した方が良くはないか、少しは明るい。ここじゃ蚊に刺される」とあなたは誘って、先に歩き出す。じきに事務所前の灯りの下にみなが揃う。

「電話で話したあと、おたくはオーナーに六時に会うことになったと教えなかったの?」時間が相当食い違ったことでああなたはタクシー運転手を疑っている。

「言つてない。しかし、旦那と夕方会うことになったのは知っているはずだ」と運転手は答える。

「本当は彼の帰りを待つ必要なんかない。旦那がハンドル

交換を承知してくれば、それで問題解決だ」腕に入れ墨男が、その言い方があたかも当然のことであるかのよう
に落ち着いた声で言う。

「いや帰りを待った方がいい」仲間の写真家があなたに告
げる。

「待つ必要はない。時間の無駄だ。そうすれば早く家に帰っ
て飯が食える」。腕に入れ墨男があなたの仲間に反論する。

「マスターは交換の必要はないと言っていた。彼なら治せ
ると。請け負うとも。彼が戻るのを待った方がいい」あな
たは依然としてマスターが「安引き受けしちやだめだ」と
言った言葉をしっかりと記憶している。

「いや、そう言わずに。いくらもかかりませんよ。交換し
てもらえませんか。そうすりゃ、すべて丸く収まる。巨
那はお金に困る人には見えないのに」タクシー運転手は泣
き落としにかかる。

「見かけ倒しかもよ」と親友のアートディレクターがちゃ
ちを入れる。

「ま、もうちよつと待ちましようよ。どうせいままで待っ
たんだ」あなたは友人のホットな気分を醒まして、なん
とかこの場の雰囲気を治めようとする。

「戻ってくるかどうか分かるもんか」と腕に俺済み男が意
見を述べる。

……あなたたちは夜八時までで待ち、それぞれならば
らに帰ることになる。論点は元のままで、付け加わったも
のは無い。あなたと仲間たちは路地の入口まで歩いて行
く。タクシー運転手は自分の車を運転していく。彼はあな
たたちに乗って行けとは声をかけない。整備工場の責任者
を待つ間、時間が過ぎていくのに、相手側の得になること
と、あなた側の損になることについての話し合いがますま
す激しくなり、最後には互いに別れて帰宅することになっ
ても、ただの挨拶にしか過ぎない別れの言葉も言いたくな
い雰囲気になっていたからである。

仲間たちが帰宅しようとして路地の入口に向かうのに対し、
あなたは彼らと別れて総合病院へ傷跡の処置に向かう。

傷跡の消毒が済んだあと、あなたは被害者たちの姿が
見えないのに今回もまた全員部の処置代を支払う。支払
う時もあの爺さんと子供や孫たちはどうしてまだバンコク
に留まっているのかという疑念は消えない。しかしそれも
ただの秘かな疑念に過ぎない……。

その夜あなたは夢を見る。

寂寥の道路上を車で走っている。

突然、風の中を漂っているような気分になる。

光がああなたの顔を照らす。

ブレーキが先の尖った鉄になる。

ブレーキをしつかり踏んだ脚をそれが貫く。

車は宙を舞う。

ドーン！

あなたの中の野獣が一斉に咆哮し、

目覚める。

抑えろ……そいつを抑えろ。

5

火曜日の朝……。

その後も時は経過して今日になった。額の傷はもう心配
いらなくなっている。そいつは日時の経過、医者が処方し
た薬の効用とともに自然にゆっくりなくなるはずだとあ
なたは思っている。残っているのは膝の痛みだけだ。そいつ
はまだ歩く度に苦痛を与える。それでも最初の日と較べ

ればずっとましになった。そして、今日は徒歩で職場に来
る間、あなたは他人の視線に心配する必要がなくなった。
歩くのが遅いことには慣れて、もう大変とは思わないよう
になっている。時にはあなたは、自分のぎこちない膝と額
の上のガーズの間を必要以上に何度も行き来する視線に
笑みで応じたりもできるようになった。

しかし、心の中の傷も同様に良くなっている感触はない。
昨夜、あなたは車が衝突する夢を見て驚き、真夜中に跳
び起きた。それからもう二度と寝つけず、まるで地獄
にでもいるかのように焦りまくった。今朝、路線バスの中
で立っていて、突然ブレーキがかかったときでさえ、あな
たはゾクツとして過去に一度もなかったほどの冷や汗をか
き、最近起こした事故のことを思い出して身体の震えが止
まらなかった。

一人だけになった時はほかのことだけを考えようとする
のだが、実際に起きたことに逆らって自分を騙せるのはほ
んの一瞬だけで、心は漂いつつパッと自分を掴んで引き戻
すように事故のことへ帰っていく。そしてやがては元の漂流
状態になり、車がぶつかったシーン、賠償金、治療費、修
理代を払ったシーンから順に、昨日の夜口論したハンドル交

換の交渉シーンまでが蘇り、失ってしまった多額の現金が惜しくなる。

——参ったなあ。

仕事机に向かっているままですら、心は仕事に集中できていない。あなたは意を決して整備工場に電話をかける。タクシーのハンドルは交換の必要がないと言ったマスターの言葉をもう一度確認したいがためだ。これからはもう誰にも一バーツも払いたくない。今回の事故の補償の話はこれっきりにするんだ。

呼び出し音が聞こえる。すぐに人が受話器を取って応答する。あなたの記憶ではそれはのっぽの整備工場マスターの声だ。

「もしもし、マスターですか。私です。タクシーとぶつかった例の……」とあなたは自分のことを明かす。

「はいはい、なにかご用ですか？」

「昨夜はマスターはどこにいたんですか？」

「ああ、家にいました。奴さんに会うのが面倒で。話がちょっと進まないからね」その声には皮肉っぽい笑いが籠もっている。

「八時まで待っていたんですよ」

「で、結論は出ました？」

「結論も何も。ただマスターの帰りを待っていたので」

「こつちの考えでは交換の必要はないです。奴さんとは話が通じない。自分の得になることばかり言い張るから。昨日、奴さんは昼前にここへ来たんですよ。旦那とは話があった、ハンドル交換にに応じてくれたから、新品ハンドルの金を先にもらいたいと言って。私は言ってやりましたよ。え、それはないって。だって旦那には交換の必要はないって話したばかりでしたからね。そこで旦那に電話するからちよつと待ってくれといったんです。それでも信じないなら電話で確んだと言ってるだろうと。それでも信じないなら電話で確かめても良いけどってね。わしは答えたよ。駄目だ、旦那の口から直接聞くまではって。しかし、あいにく旦那は不在だった。そしたら奴さん、またあれこれとうるさく言うんだ。自分で部品を買ってくると言ったが、わしは承知しなかった。旦那と話すのが先だと思って。で、いまこうやって電話で話して、奴さんがわしを騙そうとしていたことが分かった。奴さんに買いに行かせなくて良かったよ。でなきゃ、ハンドルを新品と交換していたところだ。まったくこすつからしい野郎だ」

「昨夜だつて絶対に交換してくれとうるさくて。とりあえずマスターが戻るのを待つてからと言つたら、気分を害したようになって」

「交換の必要はない。警察署で交わした署名入りの誓約もある。怖いものはないんだ」相手はあなたの側に立つてくれる。

「こうしましょう。これからはマスターがどうすべきかを決めて下さい。何か交換の必要があるものが出てきたら、そうするかどうかは社長次第です。お任せします。そうすればこつちの用はマスターに渡すお金を用意することだけですよ」とあなたは笑いながら言う。「それでもしないといつまでも頭が痛いだけで、仕事にならない」

「了解です。任せてください。もし奴さんがまた旦那にちやもんつけてきたら、わしに言つて下さい。警部に取り次いで話をつけてもらいますから……」

「いや、それはありがとう」あなたは気分がぐっと軽くなる。「……それじゃ、これで」

「ええ、何かあればすぐ私に電話して下さい。では失礼します」

……あなたは整備工場の責任者があなたの利益を守つ

てくれるということに心から安堵して受話器を置く。

少なくとも今回の悪夢のような事件は、あなたを誰からも搾取しない好人物、あなたのような躰ぎ男の足をさらうことをしない好人物に引き合わせてくれた。事故の夜にあなたをアパートまで送つてくれたタクシー運転手もそういった一人だ。もう一人、あなたにガレージのマスターを紹介してくれた若い警部がいる。三人目がガレージのマスターだ。

偶然とはいえこの三人との出会いは、世の中には善人がもつとたくさんいて、ただその人たちは公衆の面前に姿を現す機会がないだけのこと過ぎない、新聞紙上で公になり、毎日読まされている、大部分が悪の見本のような事件のせいで、一定の人々やあなたの親友でさえ世の中には解決策はないという見方をさせてしまい、その結果、誰も彼もがただ己のために自分一人がサバイバルする道を探すことになっている、というあなたの信念を支えるものとなった。

たとえこの三人が、あなたたちがかつて考えたような円環モデルの効果まで考えて行動しているのではないにしても、それでも彼らがあなたに対して為したことは、少

なくとも、あなたにこれからも他人を助けるために働こうというやる気をおこさせるという効果をもたらした……。

午後、あなたは一通の手紙を受け取った。宛先の字を見た瞬間、それがあなたの妹からの手紙であることが分かった。あなたは急いで封を切り、心でどうか悪い知らせでありませぬようにと祈った……。

兄さんへ

母さんに頼まれてこの手紙を書いています。兄さんは二十五日に帰ると言っていたのに、どうして来なかったんですか。母さんは毎日愚痴っています。父さんは、仕事が忙しくて帰えられなかったんだろうと言っていますが、母さんは、仕事が忙しければ忙しいで、手紙でそう知らせてくれればよかったですのに、どうして何も知らせて寄こさないのかと文句を言っています。母さんは、兄さんが病気が、何かあったんじゃないかと心配なのよ。この手紙を読んだら、お返事を下さい。そうすれば母さんの心配もなくなります。

昨日、上の兄さんから手紙がありました。ソングライン（タイ正月）に帰ってくるそうです。奥さんや子供を連れて。上の兄さんの話では、一年に一度は家族が揃って顔を合わすべきだそうです。歳を取れば取るほど互いに離れていく。

いまの季候は寒くて、朝もとても暗く寒いです。寝るときは毛布を忘れないで、風邪をひくからと母さんは言っています。兄さん、来るにしても来ないにしても、母さんに手紙で知らせて下さい。そうすれば心配をかけずに済みますから。もし来るのなら、英語のカセットテープを私に買ってくるのを忘れないでね。

敬具

妹より

あなたは繰り返し手紙を読んだ。あなたが来るのを待っていた母親の顔が思い浮かぶ。長尾船が家の前を通る度に、母親は首を伸ばして待っているに違いない。

あの交通事故があつて以来、身辺が忙しくて実家のことを忘れていた。時間がなく、想う気持ちもない。考えるのは次々に舞い込む難題をどう解決するかだけだった。本当はあなたは電報を打つべきかを考慮してみるべきだった

のだ。そうすれば家の方に余計な心配をかけずにすんだらう。

——お前は本当に使えない男だ。

母親が毛布を使えと忠告しているという一節を読んだとき、あなたは滑稽な気持ちを抑えられなかった。子供時代からいまに至るまで、毛布を着て寝なさいと母親は口を酸っぱくしているのが常だった。それで、あなたは時々、母親というのは子供を絡めている心配の綱というものがあつて、それが母親がいつも口にする毛布なのだと感じた。

毛布、温かいもの、子供を寒さから守ってくれるもの。

……仕事が終わると、あなたは傷跡の処置に行く前に、電報を打ちにいった。「ぼくは元気です。心配無用です。正月はたぶん帰れません。終わらせなくてはいけない仕事があるので。みんなに新年の挨拶を送ります」

電報の文面に嘘があるのをあなたは知っている。

——お前は母さんに嘘をついた。しかし、あなたにはそうする必要があつたのだ。家の全員に安心してもらうために。家に帰ったら本当のことを話すつもりだった。

抜糸の日が来た……。

運はまだあなたに傾いているようで、あなたの額の上の傷痕はすでに小さなものになっている。医師はあなたに、いずれ傷痕は平らになると告げる。

あなたと総合病院の仲を取りもつていた関係が終わる。あなたと老人とその子供たち、それから彼の姪っ子との間の関係が終わる。警察署の上で結ばれた関係という観点からも、あるいは総合病院を通じた関係という観点からも、これからはもうあなたは彼らの傷の処置代を払う必要はない。

みんな切れてしまえ。

あなたはホツとした気分で病院を出る。一つの荷物は片付いた。残っているのはまだ未解決のまま心に引っかかっているタクシー運転手だけだ……。

抜糸が終わった後も、タクシー運転手は四、五回にわたって電話をかけてきて、あなたを悩ませた。電話の内容は毎回あれこれといった要求で、いつもあなたをいらつかせた。しかし、あなたはもう彼に取り合わない態度に出た。ガレージに連絡するように言ったからだろう、電話は次第にかからなくなった。

……それが今日までだった。今日、あなたはまた彼か

らの電話を受けた。

「またなにか？」先方が名乗った後、あなたは素っ気なく訊いた。

「修理が終わった。外へ出てきて見てみない？」彼の声はぶつぎらぼうだった。

「終わって良かったじゃない。これからはまた稼げる」あなたは喜怒哀楽を抑えた声で答える。心の中ではこの要求の多い男とのことが完全に終わると考えると、隠しきれないほどの嬉しさがこみ上げてくるのに。

「稼げるものか。出てきて見てくれよ」先方はなおも急かす。

「どうして？動かないの？」

「動くのは動く。だが、ガタガタ揺れちまって」

「真つ直ぐになつてる？」

「ああ、だが、スピードを上げると、ガタガタする」

「それ整備工場に言ってくれないかな。向こうにはもう修理代を払ってあるから」あなたは整備工場のマスターに前もつて二万を渡してある。

「こんな調子で、俺にどうしろと？」先方はまだごねる。

「だかガレージのマスターと交渉して。こっちに言つてこら

れても困る」

「向こうは直さないと云つてる。もう終わったと。事故前は確かに古かったが、がたつきはしなかった……こうなったのに、そつちはどう思うんだ？」

「だから言つてる。整備工場のマスターと話してくれと」

「言つたよ。そしたら、警察署へ行つて訴えろだと。畜生……。あいつはあの警部とつるんでやがるんだ。元々古かつたなんてほざきやがって。古かつたのは古かつたが、走つているときにガタガタ揺れることはなかった」

「じゃあ、警察に行つてそう訴えたら？」

「アホらしい。どうせ奴側の肩を持つに決まつてる。だから旦那に電話したんじゃないか。何とか助けてくださいよ……」相手の声が哀願調に変わる。

「どうしたらいいのかわからないよ。毎日懸命に働いて稼いだ金を工場に払つたんだ。友だちからも借りたんだぜ。もう一度やつてくれと頼んでも、ガレージ側はまた追加の修理代を要求するに決まつてるし……」

「何とかお願いしますよ。この通りだ」相手の哀願調の声がいまのあなたはさら恐ろしいものを感じられる。

「何も出来ません。マスターが修理は終わったと言うんな

ら、終わったんです。それだけのことでしょう」。あなたは無感情かつ冷静な声でそう言い張る。

——対処する義務があるのはガレージだ、とあなたは思う。

「馬鹿野郎、くたばつちまえ。くたばつちまえ」相手は大声で雑言をあなたの耳に叫ぶ。

あなたが何か反論しようとする前に、相手が受話器を置いた音が聞こえる。あなたは啞然とする。あなたとタクシー運転手の関係がそんな罵詈雑言で終わるとは思ってみなかった。

茫然としたまま電話を置く。耳にはまだ運転手の罵詈雑言が響いている。

——それは俺の間違いだろうか？ あなたは自問する。

6

あなたは長尾船から棧橋に降りる。船のエンジン音が小さくなると、あなたの妹が棧橋に降りてきてあなたを探す。あなたの姿を認めた途端、彼女は小走りに駆け寄ってあなたを迎え、手から荷物を受け取る。

「正月、来なかったのは兄さんだけよ」それが妹の口から

出た最初の言葉だ。

「本当に来れなかった、仕事が山盛りで」

「他の人はみんな休暇を取るでしょう。兄さんはどうして休まなかったの？」

あなたはこれからも妹に嘘をつかなくてはならないことになる。母親が床下のハンモックの上から笑顔で迎えられる。あなたは手荷物を置いて、母親に挨拶の合掌をする。

「母さん、元気？」

「ああ、元気だよ」

「父さんはいないの？」

「お寺へ行ったよ。お前、お寺に寄ってきたんじゃないのかい？」

「いや。車で来たんじゃないんだ。母さんにサロンの生地を買ってきたよ」あなたは急いで紙袋から生地を取り出す。

「買ってこなくていいのに。無駄遣いになってお金が勿体ない……」と母親が愚痴を言い終わらないうちに、

「私のは？」と妹が嘴を挟む。

「おう、忘れちゃった」彼女は失望で一瞬間をしかめるが、あなたがプレゼントの包みを差し出すと、たちまち笑顔に

なる。あなたは笑い、母親も爆笑する。母親から「どうして車で来なかった？」と聞かれなかったことにあなたはホツとする。

「水を浴びてきなさい。暑い中を来たんだから。お前は兄さんにカランと石鹸を用意しなさい」母親は、あなたが買ってきたカセットテープときれいな色の服を眺めている妹に告げる。

……帰省したときはいつも、あなたは運河に入り、水をかき分けて進む。その時もよく最近の出来事を思い出す。あなたを包む水は冷たく、子供時代の感覚、あなたとこの運河にとって幸せだった時代の感覚が戻ってくるように急ぎ立てる。

あなたはいつから運河との結びつきが始まったのかをうまく言えない。それでも運河を見たり、川を見たりする度に、あなたは故郷に帰りたくなる。家ノ前の運河の匂いを嗅ぎたくなる。それはあなたを幸せな気持ちにさせてくれる不思議な匂いだ。ほんのわずかな時間にしか過ぎないのに。

……夕食が終わって夜になると、あなたの妹は食器を片づけて洗い、父親は気持ち良さそうにタバコを吸う。あ

なたはそこではじめて起きたことのすべてを話して聞かせ

る。
「……もう気にするな。身体の外は怪我は身体内部の損傷よりましだ」。話を聞き終えた父親はそう言って慰める。

「あたしが言ったとおりでしょう、絶対何かあったって」母親は父親に「あんたが私を信じないから」と言わんばかりに告げる。

「そう、あったんだよ……」。あなたは母親の言葉を引き継いで、自嘲っぽく言う。「そんなわけで母さんに二万五千ばかり用立ててもらえないかと思って。あるかな？」

「持っていないよ。一体全体だよ、昔の借金も返さない内から。また貸せて言うのかい」母親はふくれた面をして愚痴を言う。しかし、あなたには母親の本音は分かっている。「母さん……そんなこと言わないで、……ね、お願いだから、この通りだよ」

「会社に投資した分は、おまえ取り戻せそうなのかい？」
「ああできる。でもほとんどは資財類に投資したんだけどね。お陰で仕事が増えたし、いまでも続いているんだ。ま

だ母さんに返せるほどの稼ぎじゃないけどね……」

「何をやるにも、身の丈を超えることをしちゃいかん。そのうちにしくじって苦労することになる。欲は慎みなさい。欲つて奴は人の目を見えなくさせる……」父親は落ち着いた、説得力のある声で警告する。

「うん」とあなたは軽く返事する。いま父親に誓いを立てる勇気はない。そこで家の前の運河に視線を落とす。

……運河の流れはどす黒く、月光の黄色と楽しく戯れている。川面を渡る風が表面を揺らす。船のエンジン音が遠くからかすかに届く。こんな時間は、まるでもう一つ別の世界にいるかのように心が落ち着く。

その夜、あなたは故郷の家の空気と毛布の温もりで安眠する。何の夢も見ないほど完全に熟睡する。ずっとあなたの夢に現れてぐるぐる回転していた自動車事故の夢さえも見ない……。

あなたはグツグツという音を耳にして目を覚ます。目を開けると、台所から漏れている光が目に入る。たぶん母親がご飯を炊いているのだろう。あなたはまた目を閉じる。黎明の空気はまだ涼しく快適だ。毛布の温もりが、もう一眠りの考えへと誘惑する。しかし、身体はもう寝よう

とはしない。入れ替わったムードに浸って熟睡したせいかもしれない。だから、アパートでの毎朝のように眠気が抜けないということがないのだろう。

あなたは毛布をめくると蚊帳の裾を開けて抜け出し、台所に向かう。母親がガス炊飯器の前に立って料理をしている姿が見える。

「おや、もう起きたのかい？」母親は振り向いて尋ねる。

「何時頃かな、母さん？」

「まだ五時前じゃないかい。バンコクでも、毎朝こんなに早いのかい？」

「いや。たいてい七時だ」

「もう一度休んでらっしゃい。夜が明けたら、起こしてあげるから」と母親は優しい笑みをあなたに送る。

「もう寝過ぎちゃって、眠たくないんだ」

「それじゃ、顔でも洗ってきたらいい？」母親の口調はいまでもまだあなたが小さい子供でもあるような言い方である。

あなたは台所を出る。母親はまた身体の向きを炊飯器に戻す。台所仕事をしているときの母親の姿は、子供時代のシーンをはっきりとあなたに思い出させる。

……あなたと兄は毎日今朝のような未明の時間に起こされた。それは母親があらかじめ子供のために、夜になれば就床し、朝になれば家事を手伝う、朝食を食べ終えれば早めに学校へ行くという細かいスケジュールを用意していたかのようなだった。早起きの人は寝坊な人間よりたくさん働く時間が出る、というのが母親の口癖だった。当時のあなたは未明の時間に起きなければならぬのが嫌이었다。だが、そうしなくてはならなかった。その後、あなたはその当時嫌いだっただけで、いまでも隠された幸せとして残っていることが分かった。それはかまどで燃える薪の匂いのなかに潜み、朝の寒さを追い払うのを助けた。時には遠くから聞こえてくるラジオの音楽が、かまどの薪が燃える音に混じった……

あなたは洗顔を終えて寝室に戻る。蚊帳を片付け、毛布を畳んでから家の外に出る。そのまま棧橋の方へ歩いて行く。棧橋のベンチに腰掛ける。空が空け始めている。霧が水面にたちこめ、ホテイ草がゆつくりと漂うように流れている。目の前を手漕ぎ舟がお寺の方向へ過ぎ去る。あ

あなたは目でその小さな船が霧と広漠たる川の向こうに消えるまでを見つめる。

視界にあるものは静寂である。身につけて持ってきたあなたの不幸な身辺雑事と較べるとき、それらはまるで別世界、別次元のことにようにこの場所からは離れている。それでもまだあのことを考えずにはおれない。いずれにせよ、あなたが負った負債という事実からは逃れられないのだ。月曜になれば、あなたはまた奴と顔を合わせなくてはならない。両親のお金を一体誰に渡すことになるのか。

昨夜、あなたが家族に語った真実は必ずしも全部ではなかった。車で帰らなかった理由についてあなたは何も言い訳をしなかった。あの事故車の修理は終わったのに。あなたが家族に言ったのは「修理がまだ終わっていないんだ」だった。

「終わりましたよ。いつでも受け取りに来て下さい」背の高いマスターが電話越しにそう言った。

「ええ。どうもありがとう。仕事が終わったら行きます。」あなたは解放された気分です話器を置いた。

この日をどんなに待ちわびたことか。二ヶ月以上にわたつ

て起きたことが完全に幕を下ろすときが来たのだ。

今後は、自分が複数の人間に対して抱いた怒りはゆっくりに消えていくだろう。車の中の品物を盗んだ者、ガソリン泥棒、あるいは老人とその息子や姪っ子たち、それにタクシー運転手とその仲間に対して抱いた怒りはゆっくりに消えていくのだ。

時間、それは彼らがあなたにつけた傷を洗浄し、少しずつ薄めていく。

その日の仕事を終えると、あなたは整備工場に向かった……。

あなたの車は見違えるような新車の状態になってそこにあった。塗装し直された車体はピカピカに光って所有者が受け取るのを待っていた。あなたは真っ直ぐに車に向かうと、目できちんと外回りをチェックした。

「試しに外を走ってみて下さい」とマスターは笑顔であなたに告げた。

「全部自分でやったの？」あなたはまだ半信半疑だった。

「ええ。特別に仕上げました。あなたのような善人にはそうでなくちゃ」冗談を言っているふうには見えない。それでもあなたにはそれが本心から出た言葉なのかどうか

判断がつかなかった、……公道で試運転をしてみるまでは。その後初めて相手が冗談で言ったのではないことが理解できた。

あなたは試し運転をしてガレージに戻ってきた。のっぽのマスターがオフィスの前で待っていた。あなたはドアを開けて助手席に座っていた背の低い整備士とほぼ同時に車から降りた。

「何かあったら、私に言ってきて下さい」彼は満面の笑みでそう言うと、工場の従業員の様子を見に行った。

「どうです、ちゃんと治っていたでしょう？」のっぽのマスターがやって来て訊いた。

「どうぞ中へ」。彼は先に立ってあなたを事務所に招き入れた。それから椅子に座ると、全費用の支払い明細書をつまんであなたに差し出した。受け取ったあなたは明細書に仔細に目を通した。

「えっ、四万五千で話がついていたんじゃないっけ？」四万八千六百六拾バツという合計金額を見たあなたの胸に疑念が生じた。

「実はですね……」相手は一瞬言いよどんだ。「……あのときは見積もりを間違えていたんです。これが増えた分

です」そう言って相手はピンク色の領収書の数字を指で示した。「これはその道のプロにやってもらうしかありませんでした」

あなたは相手が指さした箇所を丁寧に見た……。

「ここでは千九拾パーセントだけになってるよ」あなたは数値の違いを指摘した。

「部品の値段が上がったんです。それに工賃だって何日分もかかってますからね。最初は一ヶ月のつもりだったが、それでは終わらなかつた。あの時の見積額じゃ赤字で、割に合わないんですよ。どうかこっちの気持ちをお分かって下さい。何かあったらサービスでやってあげますよ。その方がよい……今回の仕事では、はっきり言うと、私の利益はほぼゼロなんですよ。あの餓鬼たちの労賃もあるし……」

「それはないよ」あなたはそれでも相手の言を真に受けはしなかつた。「元の金額でいこうよ。いままで助け合ってきたじゃない。お願いしますよ」あなたは懐柔しようとして微笑みかけた。

「本当に駄目です。あの金額じゃ私の方は真っ赤っかですよ。本当に赤字なんです」相手は真剣な表情で言い張った。「お願いしますよ、そこを何とか」

「本当に駄目なんです。これって男の意地をかけて言うんです。今回の仕事では私の取り分はほとんどないんです。思いのほか時間を食ったし、例の警部に渡す分も取っておかないと……」

「えっ！ あの警部にどんな関係が？」あなたには相手の話が呑み込めなかつた。

「あの人がお客さんを探してきてくれるんですよ。それで5%を渡してるんです。だから切れ目なくお客さんを紹介してくれる。でないと、ほかの整備工場に振られしうだけですからね……」。彼の声がそんなの当然のことだという調子になった。

しかし、あなたにはそれが当たり前のことだとは思えなかつた。あの警部がそこまで邪悪な人間で、ほかの人間と同様にあなたから金を巻き上げようとしていたとは思ってもよらないことだった。何かに胸をついばまれている気がして、あなたは言葉を失った。

「もし最初の予定通りに終わっていたら、こんな計算書の金額でなく、元の金額で収まっていたはずですよ。こいつを新品と交換してあげなかつたら」と言って相手はピンク色の紙を指さした。「おたくが自分で交換しなきゃならな

くなっていた。元のはほとんど使えなくなっていたからね。交換して正解だったよ。すっきりした。運転中に何かあったらことだからね。旦那はとも良い人のようだから、しっかりやろうと思つて。そんなわけで……」

「こうしましょう。ぼくもマスターを信じていたから、細かい契約は交わしていなかった。せめて四万七千でどうです？ 元の金額に二千プラスと言うことで」

「困ったな、本当に駄目なんですよ」相手は即座に答えた。「で、おたくの取り分は？」

相手は明細書をとつてもう一度詳しく時間をかけて見ていた。

「四万八千ですね。掛け値なしの金額です。……警部用にはそこから二千ちよつと」

「でもぼくから金を取つて警部に渡すといわれても……」あなたの声が大きくなる。「ぼくが警部を雇つたわけじゃないのに」

「ちよつと。私のことも考えて下さいよ。警部へ渡す金のことほつかり漏らしたことです、旦那は善人だから。私の方にはほとんど何も残らないって伝えたかったんです。今後はもし何か不都合があれば、直接私にご連絡ください

い。特別にまけさせてもらいますから。ね、それでお願いできませんか」相手の声が、まるで非は自分にあり、あなたに許しを請うかのようなお願い調になった。

あなたは腹をくくつた。よし、これで一切を終わらせてやる。リュックを開いて小切手帳を取りだした。帰つたら家の金を持つて、すぐに口座に入れようと考えていた。

「一ヶ月ほど待つてもらえるかな」まだ小切手に署名してないのにその言葉が口について出た。

「あのですね……」相手は困つた顔つきになった。「小切手は受け取らないですよ。信用していないわけじゃないんですが……ここでは現金以外は受け取っていないんです。正直に言うと、振り出しに言つても、他人のチェックは受け取つてくれなれません。だからチェックでもらつても使えない物になりません。現金でいただくのがベストなんです。私が旦那を信じていないなんて勘ぐりはなしですよ」

あなたはすぐに不機嫌な顔つきになって、リュックに小切手帳をしまった。

「マスターからのお願いは通すが、こつちのお願いは通さな」といふことですか」

「いやそういうことじゃなくてですね。どう言つたら良い

か。本当に恐縮ですが、すべて旦那にお話しした通りなんです。どうすれば良いのか。どうかこっちの身にもなってくれませんか？……」

相手の物腰や声にあなたは同情し始めた。この人は本心で話しているとあなたは考えた。しかし、もしかこれが演技なのだとしたら、あなたも演技には思えない演技でお返ししてやるつもりはあった。

「じゃあ、車は月曜に取りにきます。残りは二万八千で良かったかな」あなたは明確な返事を望んだ。

「ええ」

あなたは立ち上がって事務所を出た。追加で払わなくてはならなくなったお金のことは考えないようにした。ピンク色の領収書と増えた労賃が心を慰める理由にはなった。

しかし、あなたのお金の一部があつた若い警部の手に落ちることに考えが及ぶと、グツグツと煮えたぎる思いが湧きあがつた。あなたを守るために彼の月給の一部として払っている税金のことに思いが行った。しかし、相手は逆にこんな卑劣なやり方であなただに込んでいるのだ。あなたがかつて考えた、市民が学校を建てるために払った税金は、学生に広告業に就いての知識を学ばせているが、広告業界は

逆に自分たちの汚いやり方でそれに込んでいるという構図と変わりはない。ちよつと違うのは、今回のあなたの件はより具体的で見えやすかったというだけだ……。

——なぜなら、お前が自ら進んで畏にはまったからじゃないか。

あなたは横になった後も、あなたのことを案じてくれていると信じた若い警部のことに考えが行った。彼の言葉はまだちゃんと覚えてる。

「本当にないんですね。いつも使っている整備工場はお友達知り合いとかもいませんか？」

考えるほど頭に血が上り、その怒りの炎は社内の物を盗んだ人間、ガソリン泥棒、年寄りとその子どもたちと姪っ子、タクシー運転手にまで拡がっていった。いざこうなるまでは、あなたは彼らのことをほとんど忘れかけていたのに、いまでは、彼らはあなたの感情の中で明白な姿を取った群像となった。まるで事件が起きたのは昨夜のことであるかのように。

こうしてあなたが賞賛する残りの人間は、あの人物一人だけになる。

あの夜、あなたをアパートに送り届けてくれたタクシー

運転手。彼は何の見返りも望むことなくあなたを助けてくれた……。

……カラスの鳴き声がある。カーカーカーカー。

あなたは顔を上げて声のする方を見る。四、五羽のカラスの黒い翼が空中を高速でぐるぐると旋回する姿が見える。

父親はカラスについてあなたと兄にいつもこう言っていた。「カラスの良いところを真似なさい、だがカラスのやり方を真似るのは駄目だ」

それは言葉遊びのように聞こえて、そのときのあなたにはよく理解できなかった。後になってなんとなく分かったのは、カラスの良いところを真似るといえるのは、朝早くから起きて餌を探すところ、しかしカラスのやり方を真似るなどというのは、カラスの餌の探し方は汚くて、虫酸が走る方法で、村人が乾燥のために干している食料を奪い、そのうえに腐ったものをついばむのが好きだからだという意味だった。

この父親がくれた警句は、その後はあまり思い起こすことがなかった。バンコクで暮らしている間は、あなたはカラスを見かけることはなかった、一羽も。

誰かが棧橋へ近づいてくる足音が聞こえて、あなたは後ろを振り返る。母親が朝食を盛った膳を抱えて歩いてくる。あなたは立ち上がって、母親の手から膳を受け取ってベンチの上に置く。

「お腹空いただろう？」母親が隣に腰をおろしながら口を開く。

「いや、朝はたいいていコーヒーですませる」

「コーヒーでお腹が膨れるのかい？」

「習慣なんだ。ご飯を食べるのはお昼……」

「ふーん、だからこんなに痩せているんだ」

「お坊さんが来たよ、母さん」運河を僧侶が手漕ぎ船で近づいてくるのを見たあなたは母親に告げる。

母親は膳を船着き場の板床に下ろし、櫓を漕いで鉢鉢のために近づいてくる僧侶を見つめる。ぐっと接近して、船着き場に水平に横付けする。その様子は厳かですらある。喜捨を受けるために鉢の蓋を撮る時でさえ、戒律を守る正しい姿勢をくずさない。

喜捨をする母親の物腰は、とても幸せそうに見える。

一人の僧が離れていくと、二人目、三人目の僧が続く。僧侶がすべていなくなる頃には、おひつのご飯も、碗のおか

ずも底をついている。最後の僧の小舟が船着き場を離れると、母親は僧の背中に向かって合掌する。

「来て。連中が群がってつついてるよ」おひつの底にへばりついたご飯を運河に捨てていた母親があなたに声をかける。カイエーン魚（小型ナマズの一種）やイーコン魚（淡水魚の一種）が休みなく身をくねらせて米粒に飛びついている。母親がかがんでおひつを洗うと、小魚たちもその下に潜り込んで米粒を奪い合う。カレーや汁物の残りを川に落とすと、潜っていた魚たちがまた上がってきて騒々しく食べ物を奪い合う。

この種の魚は誰も食べない。というのもこれらの魚は好んで人糞を食い、川に漂う腐った犬の死肉を餌としているからだ。

母親が茶碗を洗い終わると、あなたは空になった膳におひつや茶碗を載せて家に入る。家の台所でもう一度きれいな水で洗うためである。妹が家族全員の朝食の仕度をしている。

……輪になって朝食を囲んでいるとき、悪臭が微かに忍び寄ってくる。争い合っているようなカラスの鳴き声も聞こえる。悪臭と鳴き声はいつそう近くに迫り、そのために

家族は食事を一時中断する。

あなたは船着き場の方を振り返る。腐った犬の死骸が船着き場の柱の周囲のホテイ草の叢のすぐそばまで漂ってきて止まりかけている。あなたは、屍がホテイ草の叢から離れて川の流れに乗って見えなくなるとか期待する。逆にそれは、ホテイ草で完全に止まり、少しも動く気配がない。

「行って、押しやりなさい。早く」父親があなたにそう告げる。

あなたは車座から立ち上がり、家の前の階段を降りる。「その辺にある長い棒で押しやりなさい」母親が大声で言う。あなたは母親の指さす方向を見る。

あなたは棒を手にして船着き場に降りる。近づくほど、強烈な腐臭が鼻をつく。カラスたちは依然として人などまるで怖くないと行った様子で死骸をついついている。そこであなたがカラスを追いかけて真似をすると、カラスたちは空に舞い上がる。数匹のカラスは棧橋の柱に止まり、あなたの頭の上からまた餌に群がるチャンスを狙っている。

あなたは棒を使って、死骸をホテイ草から離そうとゆくり押す。二、三匹の魚が水面を飛び跳ねる。どれも死肉

をあさるカイエーン魚やイーコン魚である。

腐臭はいつそうきつく漂い、あなたはおもわず嘔吐しそ
うになる。その気分を抑え、息をこらす。不運なことに、
あなたは死骸をうまく押し戻すためにそいつをしつかり凝
視しなくてはならない。凶体の大きな犬で、腹がガスでパ
ンパンに膨れあがっている。体毛はほとんど抜け落ち、残っ
ているのは身体を包み込んでいた白い皮膚だけである。四
本の脚は空を向いている。あなたは力を入れれば、棒の先
がパンパンになった腹を突き破りそうになるのを恐れてゆっ
くりと死骸流れに押しやる。

あなたが犬の死骸をゆっくりと押し戻している間、腐乱
肉の一部が離れて漂う。小魚たちが我がちにそれに飛びつ
く。

腐乱した犬の死骸はホテイ草から離れ、川の流れに乗っ
て漂う。上空を舞っていたカラスたちが降下して餌に飛び
つき、またくちばしで啄み始める。死骸の下では小魚た
ちがずつと群れてむさぼり食っているに違いない。その後
で死骸は骨だけの姿になり、川底に落ちていく。

あなたは深呼吸をして新鮮な空気を肺に送り込む。し
かし空気はあなたの嘔吐感を癒すまでは至らない。あな

たは突然嘔吐する。さつき胃に押し込んだばかりの食べ物
が、すべて口から迸り出る。全身の毛が逆立つ。

月曜日……

車中の人となってバンコクに帰る間中、昨日見た犬の腐
乱死骸とそれを啄むカラスのシーンが絶えずぐるぐると座
席に座ったあなたの脳裏に蘇る。それは事故の夜以降にあ
なたが体験したことと一つに溶け合い、まったく同一の出
来事のようになる。

あなたは時折、勿体ないなという思いでズボンのポケッ
トのお金に手を触れる。例の問いかけがあなたの脳裏に
浮かんだのはまさにその時である。あなた個人が抱え込
んだ負債と、オートディレクターの親友のことを思うとき、
それは、いまはまだあえて答えたくない問いかけである。
だが自分への切迫した問いかけはすでに始まっている、

お前は死肉をあさるカラスを選ぶのか、腐敗した犬の死
骸になる方を選ぶのか？

お前は死肉をあさるカラスを選ぶのか、腐敗した犬の死
骸になる方を選ぶのか？

(一九八七年三月十四日)

〔解説〕

作者のチャート・コープチッティ(一九五四〜現在)は現代タイを代表する作家の一人。バンコクに近いサムットサーコン県生まれで、多くの芸術家を輩出していること知られる国立美術工芸専門学校(通称ポチャーン)を卒業。しばらくレザークラフト職人として生計を立てた後、短編「敗者」Phu Phaeで七九年のチェー・カーラケート新人文学賞を受賞して以降、本格的な作家活動に入った。これまでに実存主義的な色彩を帯びた長編『裁キ』(Khann Dhiphaksa, 八一年、星野龍夫訳、井村文化事業者刊、勁草書房発売、一九八七年)と老人介護という社会問題を実験的技法で描いた『時』(Wela, 九四年、岩城雄次郎訳、井村文化事業者刊、勁草書房発売、〇三年)で二度、東南アジア文学賞を受賞、二〇〇四年にはタイ国国家芸術家(作家部門)に顕彰されている。

今回翻訳した小説『川面を漂う犬の死骸』は「短めの

小説」Nawaniyai Khanat San というジャンルに区分されている。西欧文学の技法を真似た近代タイ文芸界では「小説」はNawaniyai と言ひ、書き下ろしまたは新聞雑誌連載小説をまとめた物語をそう呼び慣らしてきた。日本の「長編小説」に該当する。それに対し千字〜一万字の書き下ろしや雑誌掲載単発作品は「短編」と Rueng San と呼ばれる。「短編」の半分以下の語数の作品「ショート・ショート」= Novelt は Roang San San である。「短めの小説」Nawaniyai Khanat San や「半長編小説」Roang San koang Nawaniyai、「長めの短編小説」Roang San Khanat Yao と言ひた多彩な用語がいつからタイ文芸界で使われるようになったかは今のところ不明だが、チャートが旺盛な執筆活動をしていた七〇年代後半〜八〇年代半ばではないかと推測される。上述したチャートの最初の作品『勝利の道』は「半長編小説」、「袋小路」(Con Tok, 八〇年)と『普通の話』(Roang Thammada, 八三年)が「短めの小説」にジャンル分けされているからである。ちなみにチャートより二〇年遅れて登場した人気作家プラープダー・ユン(一九七三〜現在)の作品でも『粉雪の下に眠る』(Non Tai Laong Na, 〇六年)は「半長

編娯楽小説』、『崩れる光』(Saeng Salai, 〇九年)は「短めの小説」にジャンル分けされている。こういった細かいジャンル分けは一九七〇年代半ばまでのタイ文芸作品には見られない。

チャートはこれまでに発表した長編、短編集、エッセイ集のどれも二〜四十八刷り(平均一四刷、二〇一六年時点)を数える人気作家とはいえ、決して多作の作家ではない。その一つの理由は、彼自身の文学観にある。チャートが登場する前のタイ文芸界は、長い軍事政権下の思想弾圧、自由な言論活動の抑圧から解放されて後、雨後の竹の子のように登場したりアリズム主体、労農・知識階級礼賛の「生きるための文学」が全盛を極めていた。それから約半世紀を経た今日、当時の「生きるための文学」路線が生み出した作品は書棚に埋もれ、読み返されることはほとんどなくなった。チャートがテーマとその表現技法に拘るのは、あまりにも硬直化、イデオロギー化したそれ以前のタイ文芸界への反発があり、言語芸術表現はもっと自由で多様であるべきだという信念があるからであろう。最初の受賞作『裁き』では庶民をアプリアリに善、あるいは権力者の犠牲者と見るプロトタイプ的な民衆観に

疑問を呈し、二つめの受賞作『時』では世間に見捨てられた老人の孤独を舞台脚本風に描き、『ロム・ロン』(逆風、Lom Long, 〇〇年)では自らを映画監督の立場に据えて、読んでも楽しめるレーゼ・シナリオの技法を採り入れている。自伝的小説『狂犬たち』(Phan Ma Ba, 一九八八年、宇戸清治訳、バンコク、Howling Books, 二〇一六年)は七〇年代に世界のヒッピーたちの聖地でもあったプーケットやパタヤーで酒と大麻の日々を過ごすタイの若者とその仲間たち(一人が作家自身?)のペーソス溢れる青春小説になっている。飲酒はともかく、所持しているだけで逮捕される大麻に親しむ主人公が描かれるのは近代以降のタイ小説では皆無であったことと並んで、この小説は今日でも若者の圧倒的支持を受け、ポケット版だけで四七刷(二〇〇一年時点)、二〇〇三年には現代タイの文芸作品では珍しくなったハードカバー本も出版されている。

自分をテーマ主義作家と称するチャートの表現技法の実験は小説だけに留まらない。初期の頃からSNSによる発信を行っている彼は、最新のエッセイ集『フェイスブック・重なり合う世界』(FACEBOOK Lok an Sapson kan yu, 二〇一六)と二〇一四〜一五年の二年間にわた

る友人・知人とのSNSのやりとりを生活史風に編集した上、その間の写真付きで七三四頁に及ぶ大部の本にしている。本人に言わせれば、これは単に変形的なエッセイ集ではなく、自宅の敷地内に家内工業的なアパレルファクトリーを立ち上げるプロセスにフィクションを加えた創業志向旺盛な若者向けのガイドブック小説だということである。チャートの表現技法への挑戦は、今回翻訳した『川面を漂う……』からも二人称の主人公という視点、安易な社会変革志向へのシニカルな見方、現在形と過去形の使い分けの効果などで味わうことが出来よう。(訳者)

テキスト：

ชาติ กอบจิตติ, “หมาเนาลอยน้ำ”

นวนิยายขนาดนั้น

สำนักพิมพ์คนวรรณกรรม, 1987.